

9156
Sh45
⑦

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8^m 60 1 2 3 4 5

始



外 1348
け

~~574296~~

915.6
SH45



エゼンラトエ

(群の者行旅西蘭佛)

大正
11. 9. 22
内交

同じ著者によりて

詩集——藤村詩集

小説——破戒、春、家

短篇小説集——水彩畫家、藤村集、食後、微風

小品、感想錄、及び印象記——藤村文集、千曲川のスケッチ

新片町だより、後の新片町だより、巴里だより、佛蘭西だより

最近の著作

小説——新生、櫻の實の熟する時

旅行記——エトランゼエ(佛蘭西旅行記)、海へ(航海記)

童話——幼きものに、ふるさと

感想錄——飯倉だより

小 照

(大正十年五月五日)



エゼンラトエ

(群の者行旅西蘭佛)

著村藤崎島

照 小

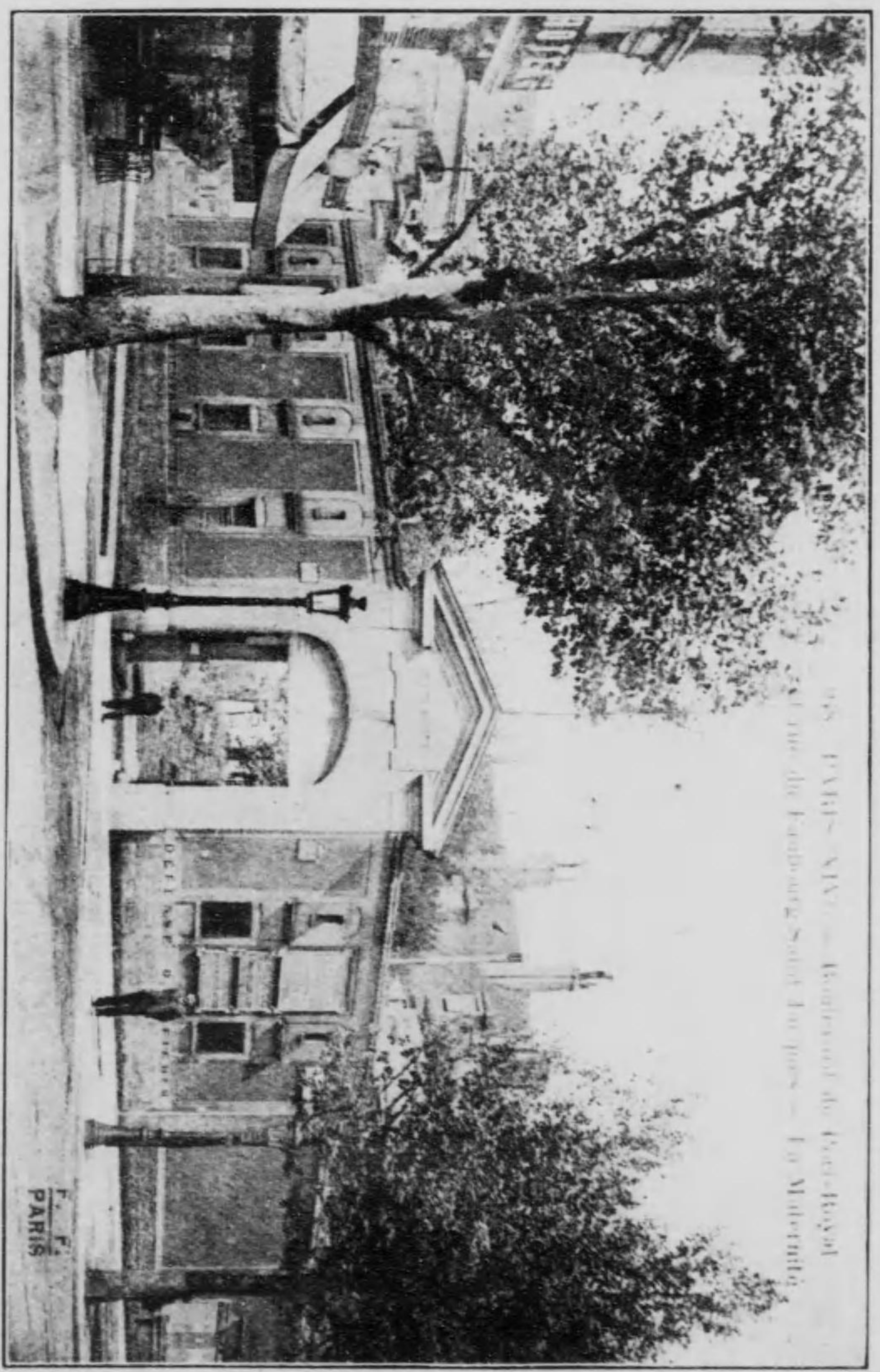
(てに倉飯布瀬年十正大)

街のルアイワロ・ルオホ里巴

(前院病科産)

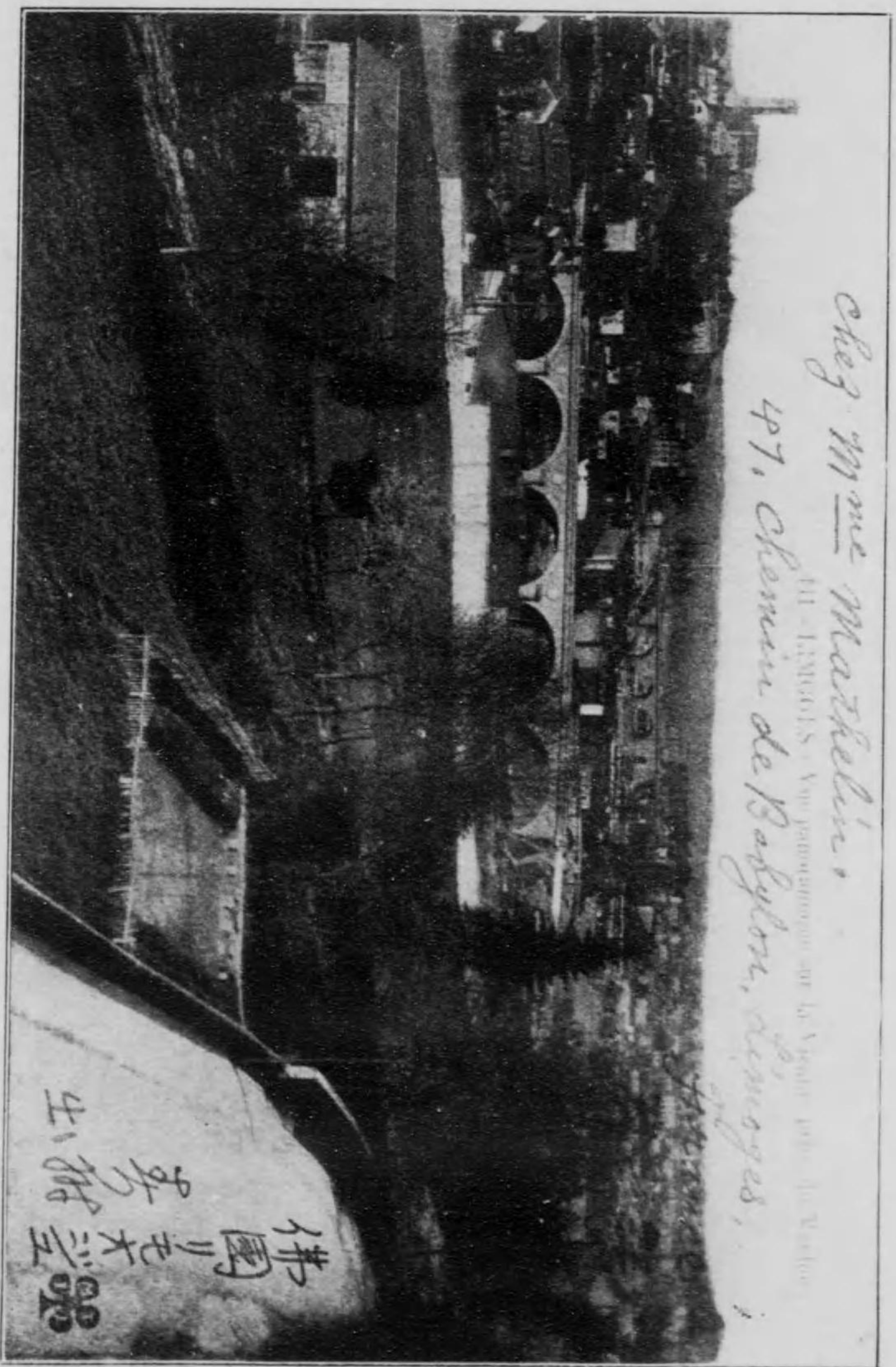
世界の文明と大都会

東京堂出版



秋のヌンエ井・トーオ

(町のユジオモリ部中國佛)



Chez Mme Mathelin,
 47, Chemin de Babelon, dimanches,
 1898

佛國
 毛大
 出附
 出

煉の又と共●イ一

(註圖中此ニナ★のトモ)



序

エトランゼエは異邦人を意味する。毛髪の色を異にし皮膚の色を異にして遠く海を渡つて来る人達が自分等の國でのエトランゼエであるやうに、一步この島國から海の外へ踏出して行つた同胞の旅行者で同じエトランゼエの心を経験しないものはない。その意味から私は佛蘭西の旅行記を書くことを思ひ立つた。

試みに、私達が全く知らない土地へ行き、全く知らない人達の中に混つた時のことを想像して見て欲しい。そこには異なつた言葉があり、異なつた文化があり、異なつ

た歴史があり、更に多くの隠れた生活の背景のあることを想像して見て欲しい。否でも應でも私達は自分等の生活の方法をその土地に適應させるために、努めなければ成らない。これは旅を楽しくするといふためばかりでなく、自分等を保護する上からも必要なことであつて、その骨折なしには長期の旅も續けがたい。私達が遠く國をさして歸つて來るといふのは、その隔絶された生活から歸つて來るのである。外國の方にあつたものと、もう一度自分等の國に見つけるものとの混淆から起つて來る不思議な心持は、所詮私達の上に働かすには居ない。歸朝當時の私達はまだ半ば旅にあるのである。自分の國が自分の國にはなりきらないのである。その頃の私達の心は遠く旅して來た土地の方の都會へも行き、田舎へも行き、異郷の土の日あたりまでもあり／＼と記憶で見ることが出来るやうな氣がする。けれども私達が紙をのべて、その印象の鮮かなうちに旅の見聞を書き得るかといふに、それには私達の心はあまりに動き過ぎて居

る。そして漸くそれが書けるかと思はれる頃には、遠い旅にあつた頃のことも兎角忘れ勝ちだ。外國の旅行記が書きにくいといふのも、その故だ。外國に居た時分のことを考へると夢のやうだ、と私に言つて見せたある美術家もある。

私が三年の旅を終へてアールズの港から佛蘭西を離れて來たのは、大正五年の四月末であつた。五月のはじめには私は倫敦から歸東の途に就いたが、その船旅だけでも五十五日を費した。

『長旅は實に私を疲らせた。思へば歸朝者の心理は世の多くの人々によつて想像さるゝほど楽しいものではない。遠く故國をさして歸つて來るほどのものは一人として旅を樂しかれと願はぬはなからう。歸國の後に於いて實際彼等が經驗するところのものは果して何であらうか。激しい神經衰弱に罹るものがある。強度に精神の沮喪するものがある。種々な病を煩ふものがある。突然の死に襲はれるものがある。驚かれるでは

ないか。それを見ても異常で複雑の作用が、制へがたい動搖が、ある隠されたる働きが、假令眼には見えず人には知られない迄も、多くの歸朝者の心を決して靜かにしては置かないことが分る、これはそも／＼長い外國生活の結果か、まだ／＼吾儕の異人種相競ふ海外の旅に慣れない證據なのか、張り詰た神経の急激な靜止と休息とに因るのか、吾儕日本人の本國の生活が外國のそれに比べて餘りにかけはなれて居るためなのか、それとも風土の激變の結果か、いづれとも私には言ふことが出来ない。日本に歸つて半年ほどの間、殆ど茫然自失の状態にあつたとは、ある友人の私に話したことだ。私はこの友人の言葉の意味を自分の身に切に感ずる。』(自著『海へ』より)

こんな状態にあつて、私はぼつ／＼航海中の印象を書いて見たが、その後いろいろさはることがあつてこの旅行記に筆執ることも果し得なかつた。大正九年になつて私は『エトランゼ』の稿を起した。それから足掛三年後の今日、漸くこれをまとめる

ことが出来た。私達が旅の土産を取出すにも、それにはをほよそ適當な時機といふものがあらう。私のやうに歸朝後四年もの間を置いて取出したでは、しかも出し終るまでにこんな月日かけたでは、これを旅の土産とも言へないかも知れない。

この書の中には巴里ポオル・ロワイアルの並木街のことがよく出て来る。私はあの古い産科病院前の下宿で、シユアレスの『三人』をあけて見て、その中のバスカルのことを書いたくだりにポオル・ロワイアル修道院に關する多くの記事を読んだ。世にも稀な數學の天才で、しかも宗教的な『感想』を遺したバスカルのやうな人物が羅甸民族の間に生れて來たのは偶然とも思はれなかつた。さういふ私はポオル・ロワイアルの名をなつかしく思つたまでで、それが自分の下宿する町と奈何いふ關係にあつたのか、その邊の精しい消息も知りかねて居た。國へ歸つてから私はある書籍をあけて見た。その中にはポオル・ロワイアルの遺跡のことが傳へてあつた。あの修道院が巴里

の附近にあつたのは千六百六十年迄のことであり、巴里の市中にあつたのは千七百九十年頃迄のことだとしてあつた。矢張私はバスカルに縁故の深い町に旅の月日を暮して来たのだ。さう想つて見ると、朝に晩に私がよく歩き廻つたサン・ジャックの通りも、今は陸軍病院にあてゝあるヴァル・ド・グラスの古い禮拜堂の前あたりも、一層旅の思ひ出を深くさせる。

世界を旅するのは、自分等を見つげに行くやうなものだ。私はこの旅に上るそもその日から、それまで深く意識もせず居た自分の髪を見つげ、自分の皮膚を見つげ、自分の眸を見つけた。そればかりでなく異郷に送る月日の多ければ多いほど、私は旅の空でめぐりあつた多くの同胞から、それまで氣がつかずに居たいろ／＼な性質のあることを學んだ。私は随分さびしい思ひをして来たが——そのさびしさは、二度とこんな旅をする氣に成れないと思ひ／＼したほどのものであつたが——しかし後になつ

て見るといろ／＼な意味でこの旅を得としなければならぬ。

私はこの旅行記の中に、多くの書き泄らしたところのあるのを遺憾に思ふ。けれどもこの稿を起さうとした日から、私は旅で逢つた同胞の旅行者のことに成るべく自分の筆を限らうとした。あの遠い空を渡る鳥の群のやうに、互に手を引き合つて異郷を旅する海外旅行者の消息をいくらかでもこゝに傳へることが出来れば、それで私は満足する。私は歐羅巴がまだ平和であつた頃に巴里に辿り着き、エルダン要塞戦のまさに始まりかける頃にあの都を去つた。私が旅で暮して見た三年の間に、あるひは病死し、あるひは戦死した佛蘭西の文學者の中には、ジュウル・ルメエトル、レミ・ド・グウルモン、シヤアル・ベギイのやうな人達があつたこともこゝに書き添へよう。これを書きつけて居る間にも、いろ／＼なことが胸に浮んで来る。舊い王宮の跡をエルサイエに訪ねた時のこと、巴里郊外にあるサン・クルウ、サン・セルマンに遊んだ時のこと、名

高いマリイ・アントワネットが絞首臺に上る前の一週を送つたといふ暗い部屋を『バレエ・ド・ジュステイス』の一隅に見て佛蘭西革命の當時を想像した時のこと——思出せば實に際限が無い。『寺院』を演じた時に見たサラ・ベルナルの舞臺、ゴウガンの舊い友達であつたといふ人の家に見たあの後期印象派の畫家の遺作、其他佛蘭西にある藝術で好い意味にも悪い意味にもあの國をあらはして居るやうなものも多くも、こゝに書き泄した。旅で私が知合になつた佛蘭西人の家庭、そこで逢つた人達、そこで聞いた言葉、そこで経験した心持なぞの忘れがたくて居るものもあるが、それも多くは省くことにした。唯、細い旅の一筋道だけがこの旅行記の中に残つて居る。

大正十一年七月、麻布飯倉にて

島崎藤村

エトランゼエ

(佛蘭西旅行者の群)

汽船エルネスト・シモンで佛國マルセユの港に着いた人達が思ひ思ひに船を去らうとした時は、私も上陸する人の中に混つて居た。この船は横濱とマルセユの間を往復する定期の航海船で、メサジュリイ・マリチムといふ會社に附屬した佛蘭西船であつたから、矢張東洋方面からの殖民地歸りの佛蘭西人が船客の多数を占めて居た。二等船客だけでもざつと五六十人からあるそれらの佛蘭西人の客を除いては、和蘭人、亞米利加人、濠洲人、印度人、フィリッピン人、それから白人と黒人の血の混つた殖民地地方の客などもあつた。唯一人、その中にコロンの港から乗込んだ日本の客があつて、名乗り合つて見ると倫敦野澤組の松山君といふ絹商であつたが、この人もボオト・セエドで船を去つ

てからは、これから上陸しやうとする船客の中に、私は一人の同胞をも見なかった。

その時はもう上陸の支度の出来た人達が、互に長い航海を終り顔に別れの言葉を告げて、順に舷の側の梯子を降りかけて居た。航海中船室を同じにしたよしみから、私の側へ来て別れの言葉を掛けて行く佛蘭西人の中には、二人の旅役者や、何を職業とするかも知れず仕舞のやうな人もあつた。この殖民地歸りの男や女の客、その他の旅行者と前後して、私もマルセエユの波止場の上つた。エルネスト・シモンの入港を知つて、上陸する人を待受ける男や女の佛蘭西人も多かつた。私とその海岸を立ち去る前に、神戸を出発した日から数へると三十七日も乗つて来た船の方を振り返ると、二本煙筒のエルネスト・シモンは黒く塗つた大きな船體を波止場のところに横着けにして居た。毎日毎日私が海を眺め暮して来た船の甲板の側面は、その波止場の位置からは見あける程高いところにあつた。

私は全く獨ほつちでもなかつた。是非にとも言はないが、一緒に上陸したいなら隨いて来たまへといふほどの程度で、マルセエユの町まで案内して呉れやうといふ一人の佛蘭西人があつた。この人は國を出てから、もう長いこと支那の四川省の方に醫者を開業して居るが、七年目とかで郷里のブルタ

アニユにある年老いた親達を見に歸るといふ。カステルといふ名で、私などよりずっと年の若い、まだ書生肌の田舎醫者だ。お世辭も何もない人で、佛領セエゴンの劇場を打上げて歸國の途にあるといふ男女の劇團の一行が毎日のやうに船の甲板を騒ぎ廻つたのを見ても、『奴等は皆、馬鹿です』と私に話し聞かせる程の人であつた。それほど冷靜な佛蘭西人であつたが、旅慣れない私のために税關行の荷物の世話までして、面倒を見て呉れた。このカステル君が居なかつたら、かねて不安な思ひをして来た私は自分の上陸間際にすら幾倍の旅の困難を感じたか知れない。見ず知らずの旅人である私に、唯上海以來ずっと甲板を共にし食卓を共にした縁故で、この親切を見せて呉れる人のあるといふことは有難かつた。

五月二十日の朝の日は初めて私が踏んで見る土の上へ射して来て居た。

「宿屋まで馬車で行きませう。」とカステル君は私を顧みて言つて、波止場の附近に客を待つ辻馬車を呼んだ。私は自分の旅の心をカステル君に分けたいにも、それには私の英語は覺束なかつたし、カステル君の話す英語はまた私以上に覺束なかつた。おそらく、カステル君のやうに久し振でマルセエユの港を見るといふ佛蘭西人に取つて、私のやうな旅慣れない道連れは随分迷惑であつたかも知れない。しかし私はこの佛蘭西人を見失ふまいとして、その人の行く方へ一緒に隨いて行かうとした。

波止場から町の方へ續く長い道路に添ふて、私は可成乗つて行つたやうな気がした。佛國の共和記念といふ大きな石門がある町の中央に建て、あつた。馬車はその石門の下を通りぬけて行つた。古い破れた洋服を着たまゝ路傍に跪いた乞食のあるのも、私の眼に着いた。驚くばかり大きな體格の馬に殿めしく光り尖つた革の馬具をつけさせ、三頭にも四頭にも牽かせた荷馬車が、幾臺となく私達の馬車の側に續いたこともあつた。カステル君が私を案内して呉れたところは、「オテル・ド・ラ・ポスト」と言つて、名前からして殺風景な旅館ではあつたが、兎も角もマルセエユの中心地に近い町にあつた。

私はカステル君の行く方へ行き、カステル君の泊る宿屋に泊つて見るつもりであつた。

「カステル君、君は晝飯を奈何します。」

と私が尋ねた時に、カステル君はその旅館を出て何處か町の料理屋で簡単な晝食をした、めたいと答へた。

私はカステル君と連立つて出掛けた。「御晝食何フラン、御夜食何フラン」など、料理屋の入口の硝子戸に書出してある。白い布巾の疊んだのを腕にかけた男の給仕が私の腰掛けたところへも来て、晝食は何にするかを尋ねた。

私はカステル君の注文するものを注文した。カステル君が焼肉を注文すれば私も焼肉、カステル君が野菜の煮たのを欲しいと言へば私も野菜の煮たのを欲しいといった。あまり私がカステル君の爲る通りに爲るので、

「何でも君の好きなものを注文するが好いぢやありませんか。」

とカステル君は私の方を見て笑つた。船中の食堂の心易さとも違ひ、まだ私には献立の表も讀めな

「マルセエユには名高い野菜がありますよ。一つ試みて見ませんか。」
こんなことをカステル君は言つて、芹の一種かとも思はれる香氣の高い野菜を私に勧めて呉れた。

三

食後に私はカステル君に伴れて、マルセエユの繁華な通りを歩いて見た。兩側の歩道や往來する男や女の歐羅巴人に混つて、船の着く度にこの港町へ集つて來て居るやうな奇異な風俗をした人達を見ると、どこまでマルセエユの町の人で、どこまでが港見物の外國人であるのか、その差別もつけられないやうに思はれた。驚くばかり人通りの多いことも、その町々へ行つて先づ感ずることであつた。私はこんな雑沓した場所でゆつくり歩いて見る氣にも成れなかつた。ごちやくとした歩道の側には

お伽話の中にでもありさうな屋臺の並んで居るのを見た。その屋臺の中には婆さんが一人づゝ居て、花を賣つて居た。何の花とも名の知らないやうないろ／＼な色に咲いたのが屋臺の前に並べてあつた。カステル君は私と並んで歩きながら、

「君の旅の服はまだ新しいやうですね。私を見て呉れたまへ、私はもう七年も此服を着て居ますよ、さうです、七年も。マルセエユへ來た序に、私も新しいのを一着求めて行かうと思ひますよ。」

斯う言つて、私にも一緒にこの港町のデパートメント・ストアを見ないかと勧めて呉れた。カステル君が求めやうとしたのは商品陳列館に『出來』で置並べてあるやうな、極地味な脊廣の服であつた。是から郷里のブルダアニユの方に兩親を見に行く人としては、不似合なほど地味なのであつた。何故私がそんなことを思つたかと言ふに、君の年齢やまだ君が結婚前であるといふことから推して、おそらく斯の歸省は君が生涯の中で最も楽しい旅であらうと想像したからで。さういへば、私は自分の側に居る質素な佛蘭西人が、その七年も身につけて居るといふ古い服で、長い航海の間の主な部分を辛棒して來たことに氣がついた。

陳列館では、カステル君は『出来』の脊廣の外に、結び目の糊付にしてある堅い襟飾を求めた。そんなものを買はないで、何故もつと柔かい襟飾を探して自分で結ばないのか、と私が尋ねた時に、カステル君の答が意外な思ひをさせた。

『そりや、君、歐羅巴人だつて、自分で襟飾の結べないものは幾らもありますよ。』

このカステル君に隨いて私は佛蘭西風の珈琲店にも腰掛けて見た。

『これが君、われ／＼の國のカフェです。』

とカステル君は私に言つて見せた。給仕に来る男への祝儀として、一杯の珈琲にも十文づゝ置くことを習ふのも、旅らしかつた。

その日は、私は税関から受取つた自分の荷物の側で、佛蘭西へ着いて初めての晩を殺風景な感じのする旅館の一室に送つた。私が旅の服の隠袖からは、上陸間際に船の甲板の上で、事務長が私の名を呼んで渡して呉れた一枚の葉書が出て来た。それは東京の方の有島生馬君が西伯利經由にして、マルセユでよめるやうにわざ／＼出して呉れたものだ。私は三十七日も全く國の方の消息の絶えた後で、

そのうれしい便りに接したことを思ひ、獨りで寢臺に上つて見た。厚綿の四角な掛薄圍は重苦しく、慣れない寢臺は寢苦しく、ろく／＼旅の夢もむすぶことは出来なかつた。

四

朝になつて、よく／＼私は一夜を過ごすといふだけのこと、斯うした旅館に泊り合せたことを感じた。窓をあけると、私はもう錆び黒ずんだ歐羅巴風の石の町に来て居た。貧しく薄汚い裏町の建物がその窓の外に見えた。さすがに朝らしく静かであつた。港に近い町の空には鴉一羽居なかつた。

東京の有島君から来た便りの中には、『プラタマの並木の美しいマルセユで、この葉書を受取つて下さるかと思ふと愉快です、』といふことなどが書いてある。まだ朝のうちに、私は自分獨りで、こしそこいらを歩いて見るつもりで、部屋を出やうとして、ふと窓の外に起る乞食の聲を聞きつけた。

物を乞ふ言葉に長く音節をつけて哀れけな歌でも歌ふやうな、その乞食の音量の深い聲は石造りの建物の中に響き渡つた。佛蘭西の言葉の通じなかつた私の耳にも、その乞食の『どっこぞ』だけは解つた。私はその足で旅館を出て見た。どんな細い横町にも必ず歩道と車道の區別はある。ある狭い歩道のところで、牛乳配達の小娘に逢つた。娘ながらに白い乳の入つた罎を提げたその姿を甲斐々々しく思ひながら、やがて歩道について町を折れ曲つて行くうちに、若葉の並木の續いたところへ出た。これが有島君から書いてよこしたブラタヌだ。私は直ぐにそのことを胸に浮べて、大きな並木の間を歩き廻つた。太い黒ずんだ樹の幹の色は餘計にその若葉をあざやかに見せた。朝通ひらしい人達が新聞を讀みながら、その間を歩き過ぎるものもあつた。町々に掲げてある文字を讀み分けることすら覺束なかつた私には、自分獨りの足ではまださう遠く歩けなかつた。旅館にはカステル君が私を待つて居た。君はこの宿で友人を待受ける都合から、猶二三日はマルセユに逗留すると言ひに來た。そればかりでなく、前の日に註文して置いた新しい背廣の肩のところを少し直させたのが今朝届いたと言つて、それを私の部屋まで見せに來た。

『どうでせう、この服は私の身によく着いて居ませうか。』

とカステル君は言つて、例の地味な服を着たまゝ後向きに私の前に立つて見せた。そして私に斯様な相談を掛けた。

『どうも私はこの肩のところが氣に入らん。もう一度直せ、と言つてやらうかとも思つて居ます。一つ見て呉れませんか。』

このカステル君と私とは、やがてもう離れ々々になるべき筈の旅の道連れであつた。そして一度離れてしまつたら、二度と相見る機會の有りさうにも思はれない道連れであつた。私はいろ／＼世話に成つた禮にと思つて、しるしばかりの國の土産を贈つたが、どうしてもカステル君の方ではそれを受取らなかつた。

國を出る時の私のつもりでは、兎も角も自分には少年時代から修めた英語がある、全く外國語を知らないで海の外へ踏出す人に比べたら何程心強からうと。英領殖民地の多い東洋の港々では、それが役に立つた。私の乗つて來た佛蘭西船の中でも役に立つた。ところが斯のマルセユの港に着いて見る

と、私の英語はもう役に立たなかつた。

五

船で別れた人達はちり／＼ばら／＼に成つてしまつたが、それでも私はマルセエユの町の方で、ほつほつ種々な人に行き逢つた。殖民地歸りの官吏らしい年とつた佛蘭西人が細君と娘を連ながら町を歩いて居るのに逢つた。航海中は青い汚れた服を着けて働いて居た船の給仕等が着かへた服に、改まつた顔付で、町の方へ来て居るのにも逢つた。旅館に近い例の料理屋へ晝の支度をしに行くと、そこでも私は二人連れの亞米利加人が食堂の一隅に来て腰掛けて居るのを見かけた。其料理屋で、私はコロンボ以來同船のよしみのある松山君にめぐりあふことが出来た。ボオト・セエドで私達の船から別れて行つた松山君は、アレキサンドリアの方面を廻つて、その日この港に着いたばかりだといふ。

「佛蘭西船も氣持が悪いと思ひましたが、私はあれから獨逸船に乗つて見ました。他の船に乗つて見ると矢張佛蘭西船の好いことが解りますよ。」

斯ういふ松山君の顔を見たばかりでも、私は力を得た。君のやうに旅慣れた人と復たこのマルセエユで一緒に成れようとは思ひがけないことであつた。

私達の食卓へは、これも船で別れた色の黒い神士が来て腰掛けた。この人は印度の裁判官で、髪の毛色の違ふといふばかりに下等な佛蘭西人の船客なぞから侮辱されると言つて航海中ひどく憤慨して居た連中の一人だ。偶然落合つた私達の間には港の旅らしい話が出た。何となくエルネスト・シモン甲板の上の空氣までがそこへ浮いて來た。壁といふ壁のすつかり鏡張りにしてあるのも、斯うした港町の料理屋らしい。物食ふ松山君も、印度の神士も、その鏡の壁に映つて居た。私は自分の服の隠袖をさがして有島君の葉書を取出した。夫を松山君に見せた。

「へえ、かういふところの氣のつく人も有りますかねえ。それりや君、餘程旅慣れた、餘程氣の利いた人でなければ、マルセエユで葉書を受取れるやうにして置くなんて、そんなところへ氣がつくも

この松山君の言葉も私にはうれしかった。

同じ英語の島の人でも、松山君は私のやうな歐羅巴の土を踏んで見たばかりの旅人とは違つて居た。私は君に誘はれて、午後からマルセエユの主なる場所を見る爲に、先づトオマス・クツクの支店を訪ねた。丁度英吉利人が佛蘭西の内地でも旅行するやうに、松山君は英語一點張りで、さつさと埒をあげる旅の方法を知つて居た。クツクの店員が頼んで呉れた馬車が來た。松山君は私と一緒に乗つて、手で馬丁に指圖をすると、車はもう繁華な市街の間の石造の車道を動き出した。マルセエユの美術館と植物園とは故の離宮の跡であるといふ。船で熱帯地方を通過して來た私は、もう一度自分の國の方に見るやうな初夏らしい日あたりをその遊園の内に見つけた。

六

旅行者を案内するに慣れたクツクの店員の計らひで、馬車が海岸に臨んだ高い崖の下まで行くと、馬丁は復そこで馬を締めた。私達は馬車を崖の下に待たせて置いて、ノオトル・ダムの寺院を見るために坂道を上つた。

崖に倚つた石垣に添うて、中途の眺望の好い位置に出ると、そこでも私達は船で別れた二三の人達に行き逢つた。見知り越しな旅の女優が、ノオトル・ダムの參詣を済まして來たといふ風で、連れの男と一緒に私達の側を會釋して通り過ぎるのもあつた。一航海はほしいまゝな享樂の夢のためにあつたやうなあの女優が何を聖母に願掛けして行くのだらうと、あはれにも思はれた。松山君と私とは歩き／＼同船の客の噂をした。船には十四五ばかりになる二人の娘が劇團の一行に伴はれて來て、膝の上ぐらゐまでしか無いやうな短く花やかな上衣を着てはよく甲板を歩き廻つて居たが、あの娘達も奈何したらう——すこし船が揺れると、船酔、船酔で、ピアノ彈きの細君の側によく蒼ざめた顔をした唄

うたひも居たが、あの男も奈何したらう——こんな話が盡きなかつた。「佛蘭西にある芝居者の仲間、殊に男の俳優と来ては話しにも何にもならないほどの墮落の極に沈んでゐる、」と船で私に話して呉れた佛蘭西人の言葉も耳に残つて居た。

「巴里は厭はしい人々で満たされて居る。眞に愛すべき巴里人でもないが、さういふ純粹な社會に近づく事は異國の旅人としては容易でない。エルネスト・シモンの一等船各で、一人お前に紹介したい紳士がある。それらの人人こそ眞に巴里人だ。近付になつて便宜を得よ。」斯うその佛蘭西人が言つて呉れたのも忘れなかつた。倫敦に長く住慣れてこれからもあの英京の方に歸つて行くといふ松山君は何と言つても英吉利最良であつた。君は何かにつけ英吉利風をあげて、佛蘭西にあるものを貶さうとした。これから巴里の方へ行つて暮してみやうと思つて居た私には又、それが氣になつて成らなかつた。船中で一人の巴里の紳士を私に紹介して呉れた佛蘭西人といふは、松山君の知らない人であつたが神戸以來すつと私の同船した客で、最初のうちは私もその人のことを天主教の坊さんか何かかと思つて居た。だん／＼惡意になつて見ると、もう長いこと支那に住む東洋最良の技師と分つた。英語を話

す二等船客の佛蘭西人の中で私が頼母しく感じたのも、カステル君とその技師との二人だけであつた。あの長い鬚を汐風に吹かせては獨りよく寂しさうな眼付をしながら海を見て居た年とつた技師も奈何したらう、と私は思つた。松山君がコロンボの港から乗込む前に、あの技師はもう私達の船に姿を見せなかつたが。

崖を上れば上るほど、海風は吹き通つて來た。やがてマルセエユの町全體を見おろすことの出来るやうな、高い眺望の好い位置に出た。その石垣のところから、私は純粹な佛蘭西風の市街を初めて望んで見た。マルセエユで見る多くの町の屋根の感じは、赤黒い。眼の下にある崖の谷間には一軒家のやうな石造の家屋が建て、あつて、その前へ番兵らしい男の立つのも見えた。私はそれを火藥庫かとも想つて見た。その邊の崖の白く黄ばんだ土は五月の日に光つた。草も光つた。

私達の乗つて來た船が碇泊する波止場の方もその崖の上から見えた。見覚えのある煙筒が港の空氣を通して、それらしく形をあらはして居た。はつきりとも言へなかつたが、私はそれをエルネスト・シモンと思つた。私達の船も随分古い船には相違なかつた。一航海の間に二度も波の上で進行を停め

機關の修繕を~~して~~して來たくらるの船だ。

七

マルセユのノオ・ル・ダムはその崖の上から地中海に臨んだ寺であつた。古めかしい本堂の建築が石であるといふばかりでなく、寺の入口に見る上下の階段で石でないところはなかつた。斯の古い寺の周圍にある石の面の何の部分にも青苔の蒸したところを見ない。國がちがへば、こんなに乾濕の度もちがふものか。何百年の風雨にさらされて、あるところは灰白に、あるところは錆黒すんだ斯の石の建築物には、乾いた古さを感じる。私達が寺の入口の前の石段を踏んで行くと、日のあたつたところに腰掛けた一人の乞食も居た。何かの寄附を求め顔に寺の前に立つて居て、私達の方へも歩き寄る二人の若い尼もあつた。こゝはもう羅馬舊教の國だ。本堂の横手には婆さんが木製の珠数などを賣

つて居た。ノオトル・ダム土産といふ類の粗末な珠數に過ぎなかつたが、その木製には白と薄紫とあつて、自分の國の方の娘達に見せてもよろこびさうなものであつた。この寺に參詣する土地の人達は斯ういふものを記念とするのであつたらう。何でもないものではあるが、でも床しく思はれた。

松山君と一緒に、私は寺の入口の扉を押して内部へ入つて見た。いくつかの彩色した硝子窓は左右の石の壁の間にあつた。その窓々から射す光だけでは、本堂の奥の方もよく見えない程薄暗い。案内者が來て電燈をつけて見せて呉れなかつたら、正面に安置してある金色なマリアの像や、燈火のつけてない白い長い蠟燭や、蓋のしてある古い風琴などが、そんな奥深いところに潜んで居やうとも氣づかなかつたくらゐだ。

二度とこんなところへ來て見る機會があらうとも一寸思はれなかつたので、猶よく見て行くつもりで、私は彩色した硝子窓の下をあちこちと歩いた。ある窓の下へ行つた。その近くには額にした船の圖などが壁の上に掛つて居た。

『額があげてありますね。』

と私は松山君に言つて見た。寺院に来て斯うした納めた額を見るのはいつれの國も變らないものだと思はれたが、でもそれが船の圖であるのは、さすがに港の寺らしかった。

この寺の内から屋外の日の輝いたところへ出ると、そのときも私達は船で馴染な顔觸に逢つた。色こそ黒いが、これから巴里を見物した上で瑞西と亞米利加とに留學しやうといふフイリツピン生れの二人の青年だ。航海中よく私達の方へ英語で話しかけに來た人達だ。船には亞米利加人の客もあつたのに、二人はその方へ行かないで、反つて私達のやうな東洋の果から來たものゝ側を懐かしがった。船で別れを告げる時に、私に手紙の交換を望んだのも、一人のサルヂサといふ方の青年であつた。

青い地中海は遠く光つて居た。丁度寺の前の休茶屋と言つたやうな小さな珈琲店もあつたので、もし馬車が崖の下の方に自分等を待つて居なかつたら、私は船で四日路あまりも乗つて來た地中海の見るところで、もつと時を送つて行きたかつた。崖の上の石垣について、もと來た道を降りて行かうとすると、その邊には海を眺める旅行者が集つて居た。

八

その日のうちに私は巴里の方角をさしてマルセエユを立たうとして居た。連れの松山君も旅を急いで居たので。

松山君はマルセエユに着いた日の午後を私と一緒に見物に費つて、その晩にはもう汽車に乗込んで居やう、途中でリオンに寄るか寄らないかは夜汽車の中で相談しやうといふほど、倫敦の方に歸り着く日を急いで居た。私の旅の心もあわたしかつた。私は自分の旅館の方に歸つて、まだこの港町に二三日逗留するといふカステル君に別れを告げ、町で夕飯を済ますと直ぐ荷物と一緒にマルセエユの停車場へ行つた。かねて荷物も減らせるだけ減らして來たが、それでも私の鞆は四つあつた。あれも要るだらう、これも要るだらう、さう思つて持つて來た物が旅を煩はしくした。

松山君のやうに巴里まで同行しやうと言つて呉れる好い道連れが出来て、どうやらかうやら私も初めての外國の汽車の中に身を置くことが出来た。私の通つて行く道には一帯にリオンの名がつけてあつて、船の着いたところもリオンの灣といひ、汽車で乗つて行くところもリオン線——もつと精しく言へば、巴里とリオンと地中海との線と言つた。客が多くて夜汽車も苦しかつた。

私達がリオンに入つたのは夜の二時頃であつた。かねて私が神戸を立つて来る時に、船まで見送つて呉れた有島君は私に向つて、『巴里へ行く序にリオンも見て行け、わざ／＼見にゆくといふことは容易でない、』と言つて呉れた。『言葉の通じないといふことも旅の面白味の一つではないか、』と言つて私を勵まして呉れたのも有島君だ。その時は私も汽車で荷物を先に送ることにして、手提鞆一つ丈の身軽な旅になつた。私は連の松山君が土地の言葉に通じやうが通じまいが佛蘭西内地の汽車旅ぐるるを何とも思つて居ないやうな軽々とした様子にも感心したし、大きくも出来れば小さくも巻けるズック製の旅行用具を手に提げて居るのにも感心した。絹商としての君は印度に眼をつけて、單身であの熱帯地方の視察を済して来たといふほどの旅行家だ。リオンには君と同じ高等商業出身の友達が居ると

かで、寄らうか寄るまいかと言つて居た君も到頭寄る方の私の説に賛成して呉れた。君が寄ると言はなければ、私も寄るつもりでは無かつた。私はこの旅慣れた道連れの降りるところへ一緒に隨いて降りた。

丁度リオンの停車場の外には、夜行でそこへ着く客を待受けて居る辻馬車があつた。

『オイ、宿屋だ。』

松山君がその言葉を掛けた丈で、扱ひ慣れた馬丁はもう馬に呉れる鞭の音をさせた。

私達を載せた馬車は深夜の町々を動いて行つた。マルセエユに着いた時はまだそれほど思はなかつた私にも、この車の上では何となく知らない土地の空氣の中へ浸つて行くといふ心持を起させる。神戸出發以來、船で寄る港も寄る港も大抵英吉利の殖民地ばかりで——尤も私は日本郵船の寄らない港へも寄つて来たが、そこはまた佛領のセイゴンとかデユブテイとかいふところであつたから、左様いふ亞細亞、亞佛利加の港々で私の見て来たものは、歐羅巴の方から移植した、不純な、殖民地風のものばかりであつた。好かれ悪しかれ、私は純粹なものゝ有るところへ来た。沈まり返つた深夜の空

氣は反つてそれを感じせしめた。やがて馬丁は『オテル・ド・ラ・グロオブ』といふ宿屋の前で車を停めた。周囲はもう入口の扉を閉め窓の戸も閉めて寝た家ばかりであつた。

九

私もその晩はリオンの旅館の給仕が支度して呉れた寢臺の側で、マルセエユの方から草臥くたはれて行つた靴の紐を解いた。

翌朝になつて私は思ひがけなく心地の好い二階の一室に眼をさました。旅客をもてなすための大きな寢臺が部屋の真中に置いてあるのは、マルセエユの旅館も、こゝも變りが無い。マルセエユの方で見えて来た陶器製の洗面器や、同じ一對の瓶のやうな水差はこゝにもある。その水差から水を注がうとする度に、陶器と陶器の觸れる音がちやく／＼鳴つた。

『珈琲？』

と給仕が尋ねに來た。給仕は私が土地の言葉に通じないのを知つて『てにをは』も何も省いたやうな物の言ひ方をした。この旅館の給仕で思出す。私の乗つて來たエルネスト・シモンが上海へ着くといふ前の日に、船の給仕が私のところへそれを知らせに來たが、あの給仕の言ふことは『明日』といふ言葉と、『上海』といふ言葉しか私には解らなかつた。私は又、遠く神戸を離れて來た晩に、初めて外國船の船床に上つて見た時、枕も毛布も見當らない厚い敷布の上に坐つて物の三十分も腕組みして考へて來たくらいであつた。國を出る日から全く朝飯もお癪あはしだ。佛蘭西の習慣として、斯うした旅館でも朝は珈琲を出すだけだ。

まだ私は船で揺られるやうな氣がして居た。私はすきな煙草をふかすために、石で意匠のしてある暖爐の前へ立つて見た。五月も下旬であつたし、部屋に火の氣一つあるでもなかつた。鐵瓶の湯が沸いて居るでもなかつた。私は自分の旅の服の隠袖からマッチを探り出して、それで慣れない香氣のする佛蘭西の紙巻煙草をふかした。

でも、このリオンの旅館は私に楽しい旅の心を起させた。あの辻馬車の馬丁が夜遅くこゝへ案内して呉れた時から、私は好い家だと思つた。

『そこいらまで一緒に出て見ませう。』

といふ松山君と連立つて、私も宿屋を出た。松山君は用事のある人を訪ねるため、私は靜に街頭を見て歩くのを楽しみにして出掛けた。リオンには京都のやうに町の中央を流れる河がある。其河の名にまで男と女の區別がしてある。これほどの人間化は英吉利あたりの言葉にも見當らない。私其男の名の方のロオヌ河の岸へ出た時は、松山君と一緒に自分獨りで歩いた。マルセエユの方で見て来たやうな若葉の並木は河の岸にもあつた。鴨川に譬へて見たいやうで、もつと水量も多く、もつと水瀬も早いかと思はれるのはロオヌだ。そのロオヌは、あだかも自然と人工を調和する佛蘭西人の才能を語るかのやうに、さかんな溪流の趣を見せながら、石で敷きつめた兩岸の間を奔り流れて来て居た。

不思議な靜かさが兩岸の町々を支配して居た。その靜かさは山地に近い靜かさだ。もつと私は歩き

廻つて見るつもりで、ある石橋から對岸の町の方へ出た。まだ私は自分獨りの足で知らない土地を極僅しか歩いて見ない。あのマルセエユの方で並木の下を歩いて見た時に起つて来たやうな、子供のやうな心持が復私に起つて来た。すこしでもリオンの地圖を手放さうものなら、私は歩けなかつた。

+

手に汗を握りながら私がリオンの町を歩いたのは、丁度上陸後三日目に當つて居た。旅館へ歸ると、私は楽しい旅の心を回復した。そして晝食の用意も出来たといふ階下の食堂へ行つて、リオンの料理を味ふ氣になつた。

食堂も靜かで樂しかつた。國を出る時、東京朝日の山本松之助君から故郷宛の通信を送れと言はれた事を思ひ、せめて航海の途中からも一二回の通信を送りたいと思つたが、漸く私が船中の日程に慣

れた頃は熱い氣候の海上へと向ふばかりであつたし、佛領セエゴンの寄港以來は遽に多數の乗客と一緒に、僅かに私は港々の土人から買求めた繪葉書を船の食堂の片隅へ持つて行つて、それに故郷の友人や親戚宛の短い便りを書くだけに止めた。マルセエユの旅館の方でも、しきりに國への通信を送りたいと思ふ心が動いたが、つい私はそれも果さずにやつて來た。私はあのマルセエユの港町のごちや／＼とした空氣の中から逃れて來て、漸くのことではつと息の吐ける斯のリオンまで迎り着いたやうな氣がした。

獨りではめつたに酒をやらない方の私も、その日は葡萄酒の小壘を誂へた。假令飲めても飲めなくても國の方の宿屋の膳に對つた時は銚子の一本も置いて見たいやうに。そこゝの食卓には旅館で晝の仕度を濟まさうとして、小聲で話し合ふ客もあつた。私は食堂の給仕が持つて來た小壘を自分の前に置いて、船で出す葡萄酒などより色も濃く舌ざりも柔かい酒の香氣を嗅ぎながら、はる／＼とやつて來た國の方の遠さを思つた。海一つ隔つた丈でも時計まで違つて居た。神戸で合はせて來た私の懐中時計が上海へ着いた時にはもう一時間の違ひがあつた。支那海から印度洋、印度洋からアラビ

ヤ海と越えて來る度に、船の食堂に掛つて居た時計の針の示す時間は動き變つた。私は幾度か自分の懐中時計を合せて來やうとして、しまひにはそれすら斷念したくらいであつた。その日まで動いて來た數限りも無い途中の印象が何となく纏まつて私の胸に浮んで來た。ふと見つけたやうな斯のリオンの旅館での靜かさは、餘計に私の氣持を遠い旅らしくした。こゝで味ふ「オール、ゾーヴル」も甘かつた。

十一

巴里まで行かないうちに私はすでにリオンの方で、この土地に在留する二人の同胞に逢つた。三井物産の支店に在勤するといふ濱崎、藤井の二君で、松山君が高等商業時代の舊い友達らしかつた。濱崎君等は私達の旅館まで松山君を訪ねに來た。そこに松山君が居ないで私が居たので、先方でもめづ

らしがれば、私の方でもめづらしく思った。

私は歐羅巴風な旅館の部屋の設備がいかにも殺風景なことばかりに気がついて、別に泊り客一同のための廣間の設備があることには気がつかなかった。そこは旅館の入口にあつて、食堂の方へも通へるやうに出来て居る。歐羅巴の旅に慣れた人達は、そこを休息の場處ともすれば、泊り客同志の交歡の場處ともするらしい。私は濱崎君等と一緒になつたのもその廣間だ。君等はもう外國生活に慣れ土地の事情にも精しい人達で、私の側へ椅子を寄せて、これから佛蘭西に滞在するつもりか、巴里には長く居るつもりか、よくそれでも佛蘭西船でやつて来たなどと言つて、新參の私を迎へるやうにして呉れた。丁度そこへ松山君も町から戻つて来た。私達四人は外國人の泊り客が聞いて居る側で、思ふさま國の言葉を出して、しばらく一緒に午後の時を送つた。

松山君は私に比べたら何程旅を急いで居たか知れなかつた。君はその日のうちに巴里へ向けて立ち去つて居た。この松山君の御相伴といふ形で、私は四人一緒にリオン見物に誘はれ、土地の料理屋の夕飯にまで誘はれた。さすが濱崎君等は日本の絹を扱ふ人達だけに、その道の話が出た。流行の中

心と言はれる巴里の風俗はロン・シャンの競馬場でおほよその大勢を決する、君等は毎年巴里に出てあの競馬場集る人達からその年の流行を察して来る、それを國の方へ打電する、斯様な話が出た。とても國の方で初対面のものが話し合はないやうな話も私達の間に引出されて行つた。これからリオンで新しい家庭をつくる爲に一度歸國したいと思ふと言出した人もあつた。よく國の方では佛蘭西の婦人と結婚した同胞のことなどが言ひ囃される、髪の色を異にし皮膚の色を異にし眸の色までも異なる人種の間は遠く離れて想像したやうなものではない、日本人に縁組をしようといふこの土地の婦人は言はゞ氣心を知り合つた下宿の娘ぐらいのもので、どうして相應な佛蘭西の家庭に生れた若い婦人が縁付いて来るなどといふことは——到底。このリオンまでやつて来たばかりで私はもう斯様な話をも聞いた。

料理屋を出た頃は日もすつかりくれて居た。その邊には、夜になつて町々を徘徊するやうな婦人が影のやうに行き過ぎるのもあつた。私達は旅館に歸つて、濱崎君等に別れを告げた。また／＼松山君と私とは巴里行の夜汽車の中に身を置かうとする二人ぎりの旅となつた。

リオンから北の鐵道に沿ふところは、おほよそ平坦な地勢で、夜行も悪くはなかつた。しかし、汽車に乗つてから氣の緩んだ私は旅疲れの出るのを覺えて、一晚中暗い窓の側で寢て行つた。時々眼をさますと、佛蘭西内地の停車場の燈火が窓の硝子に映つたり消えたりした。窓に近く呼んで來る物賣りの聲もしなかつた。

汽車で夜が明けてからも、私は半分眠りながら松山君と差向ひに腰掛けて行つた。この好い五月の季節に鳥一つ鳴く聲のしないのは奈何したのか、そんなことを不審に思つたのみで、まるで私は残つた夢のやうな心地を辿つた。巴里に近い所へ搖られて行くまでは、その心地はまだ私から離れなかつた。

十二

朝の八時頃に私達はリオン線の終點に着いた。そこは巴里にある四大停車場の一つで、かねて有島君から聞いて來たところであつた。マルセユの方から送つた荷物は先について居て、そこで私達を待つて居た。

『いよくお別れですね。』

と言って私は松山君の前に立つた。

『お蔭で、大助かりをしましたよ、こゝまで君に連れて來て頂いて。』
と復た私が言つたら、

『どうせ、君、僕だつてこゝを通るんですよ。僕はこれからサン・ラザアルの停車場へ出掛けます。そこから英吉利の方へ向ひます。まあ巴里は素通りでサ。』

斯う松山君は笑ひながら答へた。そして、『今日も好いお天氣だ』
といふ目付で、私達の側を通り過ぎる旅行者の群を見送つた。

停車場の前に辻馬車が寄せて居た馬丁は私の方へ馬を引いて來た。私は松山君に別れを告げて、荷物

と一緒にその馬車に乗った。私が車の上から振返つた時は、停車場の建物の上にある高い時計臺が遠くこの都をさしてやつてきた旅の私を迎へるやうに見えた。

初めて私はセエヌ河を渡つた。晴雨兼帯とも言ひたい馬丁の冠つた高帽子の黒い光まで私にはめづらしかつた。まだ町々の響も喧しくない朝のうちのこと、マルセエユやリオンの方で見えて来たと同じブラタアヌの並木が両側にやわらかい若葉を着けた街路の中を乗つて行つた時は、馬丁の鳴らす鞭の音や石造の車道を踏んで行く馬の蹄の音まで私の耳に快く聞えた。

巴里、ポオル・ロワイアルの並木街にある下宿が斯うした私を待つて居た。馬丁の馬を停めた並木の下あたりには、朝通ひらしい人達、労働者、牛乳の壺を提げた娘、野菜の買出しにでも出掛けるらしい女連などが往つたり来たりして居た。家番のおかみさんや下宿の女中は入口の階段を駆け降りて来て、私の荷物を運んで呉れた。二つばかり階段を上つた暗い壁の側の扉のところで、私は年とつた壯健なさうな佛蘭西の女に逢つた。その赤黒い色の朝の寝衣のまゝで私を迎へて呉れたのが下宿の主婦のシモノエであつた。

十三

シモノエの下宿には巴里に留學する大寺君が居た。土地不案内な私は知らない佛蘭西人ばかりの中へ来て、先づこの旅の同胞と一緒にすることが出来た。

私の案内された部屋へは、髪の毛の褐色な田舎出らしい下女が水を運んで来たり、寢臺の上掩ひを取換へに来たりした。客に口を利かない事を禮儀とするかのやうな斯の下女は藍色な縞の前掛を掛けて居て、黙つて部屋へ入つて来ては復た黙つて出て行つた。そこへ大寺君が私の部屋を見に来た。つゞいてシモノエも挨拶に来た。

シモノエの言ふことは全く私には解らなかつた。唯、この年とつた主婦が物を言はうとする表情で、いろ／＼と私のために氣を揉んで居ることが解つた。

「こんな寝衣の儘で大變失禮しました、いづれ着物を着更へた上で改めて御挨拶しますッて、このおかみさんが僕に左様言つて呉れと言ふんです。」

斯う大寺君が通辯して呉れたので、それを聞いて立つて居たシモネエは私の方へ向いて、

「お解りでございましたか。」

といふ風で両手をひろげて見せた。

「君の巴里に来ることは、有島君からの手紙で知つて居ました。」と大寺君はシモネエの出て行つた後で私に話した。『今朝は僕も停車場まで迎へに行つて進けやうと思つて居たところでした。何しろ君の着くのが早かつたんでね。君はそんなことを何とも思つて居なくても、有島君からわざわざ僕のところへ頼んで寄したのに、迎へにも行つて進けなかつたのは濟まなかつた。何だか僕は有島君に濟まないやうな気がする。君から國の方へ手紙を出す序があつたら、有島君にも宜敷言つてやつて呉れたまへ。』

斯う言ふ大寺君はリオンの濱崎君等が私を迎へて呉れたと同じやうにして、新參の私を迎へて呉れた。

君はよく身についた洋服の着こなしからして長い外國生活に慣れたらしい様子で、

『この部屋はこぢんまりとして好い部屋でせう。第一、この寢臺が好い。一三日前に君、この部屋が明いてね。丁度君は好いところへやつて來た。』

こんな打解けた調子で話して呉れた。

私はボオル・ロワイアルの通りを隔て、古い建築物の塀と對ひ合つたやうな位置にその部屋を見つけた。大寺君の話で、その古い建築物が巴里の産科病院だといふことを知つた。一つある窓の側へも行って見た。圓い行燈のやうな石の塔がその窓から見えた。それが巴里の天文臺の塔だといふことも知つた。國の方で見慣れたものと、今この旅窓で望むものと、その間には何の關係があり何の連絡があると思はれるほど一切が隔絶れて居た。

まだ私は船で揺られるやうな気がして居た。私は部屋にある椅子を大寺君に勧め自分でも旅の荷物の側に腰掛けて話した。

「佛蘭西の船で来るといふ人は、めつたに無い。」と大寺君は言つた。「言葉も解らなくて、困つたでせう。」

「神戸を出る時は、日本人は私一人ぎりでした。でも、船の中には英語のわかる佛蘭西人が追々出て来て助かりましたよ。どうせ外國へ行くものなら、船に乗る時からその氣で行かう、すこしでも外國風の生活の中で自分を慣らして行かう、さう思ひましてね。」

「そいつはすこし冒険だつた。」

こんな話が巴里の下宿で出来ると云ふだけでも私にはうれしかつた。其朝巴里の停車場で手を分つまで一緒だつた松山君からも、リオンの方で逢つて見た松山君の友達からも、私は已に海外の旅行者氣質とも言ふべき一種の感銘をあの人達から得て来た。この下宿に着いて大寺君に逢つて見ても矢張

左様だつた。大寺君はソルボンヌの大學に通つて經濟學の講義を聽いて居るといふことだし、年もまだ若いさかりの人だつた。さういふ年齢の相違も忘れ、互ひに志して居る方面の相違も忘れて、初対面の時からもう大寺君は「君、僕」の調子で私に話して呉れた。

「このおかみさんもね、君の来るのを待つて居ましたよ。一體、この下宿は有島君が草分けなんださうだ。まあおかみさんも親切な事は親切な人だ。同じ下宿をするんでも、成るべく利得を少くしてその中から稼いで出やうといふ主義なんでせう。もう田舎の方には家も買つてあるやうだし、追々は自分の郷里に引籠むつもりの人なんでせうよ。」

この大寺君の話で、私には下宿の主婦のことも大體に分つた。

晝に私は初めて食堂へ出て見た。食堂は私の部屋の直ぐ隣にあつた。其時、私はデンマアクの方から来て居る若い女の容と、二人の書生肌な佛蘭西人とに引合はされた。デンマアクの女と、大寺君と、私だけがこの宿に泊つて居るもので、二人の佛蘭西人の方は食事だけに他から通つて来る人達であつた。食堂の入口の壁の上には、有島君が残して置いて行つたといふ油繪の額も掛つて居た。

まだ私には奈何いふ建築物の内に一部に斯様な下宿があると言つて見ることも出来なかつた。食後にシモネエは大きな鍵を二つ私に渡した。一つは下宿の入口の扉の鍵で、一つは私の部屋の扉の鍵だ。食堂の外にある薄暗い廊下は入口からいろ／＼の部屋へ續き臺所部屋へも續いて居たが廊下の窓から射す光線が僅かに食堂のあたりを明るく見せて居るのみで、奥の方の壁も扉も見えない程暗らかつた。『見たまへ、こんなクウル（内庭）がある。』

と大寺君は廊下の窓の下に立つて古びた色硝子の戸を私に開けて見せた。石で敷きつめた窪い内庭が窓の外にあつた。五層も六層もある高い建築物がその内庭を圍んで、ぎつしり詰まつた家屋の裏側をそこに見せて居た。物干場一つ私の眼には見當らなかつた。向ふの暗い窓々へは折々来る女の影も見えたが、こんな長屋を積み上げたやうな町中には奈何いふ人達が住むとも知れなかつた。

十五

國の方に残して置いた子供のことも心に掛つて、巴里に着いた翌日私は大使館を訪ねた。そこに届いて居る故郷からの便りもあらうかと思はれたので。翌々日は又、レオミュウルといふ町の方まで用達に出掛けた。大寺君は土地不案内な私を憐れんで、大使館のあるエトワアル方面へも、日佛銀行のあるレオミュウルの町の方面へも私と一緒に往つて呉れた。巴里の株式取引所に接した複雑な町中の一角に大きな建築物があつた。いそがしく用事ありけな人たちはその界限を右に往き左に往きして居た。大寺君はその建築物の前まで行くと、その邊の町でしばらく私をまたうと言つて呉れた。そこまで案内して貰へば、歸路まで君を煩はさないでも濟まうかと私も思つた。

用達に手間取れたのと、巴里に在留する年若な銀行員に逢へたのとで、私は初めて登つて見る建築物の第三階に思はず時を送つた。私がレオミュウルの通りへ出た頃は大寺君は見えなかつた。同じやうに續いた高い石の建築物、光つた窓、歩道に添うて店を並べた種々雑多な商家の飾窓は私のゆく先にあつた。私は心覺えの電車道へと出るつもりで、入組んだ町の中の歩道を辿つた。リオンの方で方角

もよく分らずに獨り町を歩いて見た時のやうな、子供のやうな心持が復私に起つて來た。行つても行つても同じやうな知らない町ばかりが眼に映つた。

私は町を通る辻馬車に氣がついた。それを呼んで天文臺の前まで歸つて行つたのは、やがて晝すこし過ぎた頃であつた。私は町で簡単な晝食を濟ました。それから下宿へ戻つて入口の戸を開けると、廊下のところまで出て迎へる大寺君やシモネエの笑顔に逢つた。

「あんまり君の歸りが遅いものだから、多分道に迷つたんだらうツて、今皆で心配して居たところだ。僕等はまだ晝飯も食はずに君の歸るのを待つて居た。」

この大寺君の言葉に、私は冷い汗を感じた。食堂の扉の半分開いたところからは、ふざけることの好きな佛蘭西人までが笑顔を見せて居た。

「でせう。」

とその笑つた眼は私の方を見て物を言つた。

私はすゞ／＼自分の部屋へ入つた。知らない町の方で私が踏んで來た石の歩道も、そこで見て來た

日あたりも、私の眼に浸みて居た。その日ほど私は言葉の不自由を感じたことは無かつた。しかし辻馬車や辻自動車で乗り廻して見るにも勝つて、都會としての巴里の深さに初めて私が入つて見たのもその日であつた。

私の解いた靴からは、書物や、着物や、ふるさとの香のするやうなものばかり出て來た。錢別にと贈られた煎茶茶碗の類まで破れずにあつた。私は大寺君から教へられて、町の近くから丈夫なスリッパを求めて來た。部屋に居る時は佛蘭西人でもそれを足にはめるとかで、踵の方も足袋程の深さに造つてあつた。柔かく、厚くて穿き心地もよい。斯うした土地の旅には靴で通すものと思つて居た私も、僅かに足を休めることを覺えた。私は長い道中の草鞋でも脱ぐ思ひで、朝に晩にはいて居た自分の靴の紐を解いた。

シモネエや下女などの話す佛蘭西の言葉こそ私には解らなかつたが、佛蘭西人の書いたものには——な譯を通してなら——國に居る頃からの馴染も少くはない。あのマウパッサンの短篇に出て来るやうな英人達が今は實際に私の旅窓の下を歩いて居た。

私は巴里見物を後廻しにして、新しい言葉の稽古を先にした。大寺君の世話で天文臺の近くに住む語學の教師を得た。大寺君はわざわざその人の家まで私を連れて行くほどの面倒を見て呉れた。この語學の教師は下女も使はずに獨りで暮して居るやうな老嬢であつたが、習ひに来る佛蘭西人の娘などには英語を教へ、私には英語で讀本の講釋をして呉れた。さしあたり生活に必要な言葉といへば、何と言つても物の數へ方であつた。佛蘭西の言葉では可成それがやゝこしい。煙草一つ買ふにも私は一法とか二法とかの銀貨を出して、それで釣錢を貰つて来るほど十以上の數をよく間違へた。

語學の教師の家から天文臺の前を横ぎつて下宿の方へ通ふ並木の下あたりは私の好きな道になつた。そこを通る度に私はどんよりとした遠い町の空を望んだ。國の方で見るやうな底光りする青空

はここでは望まれなかつた。私が古い産科病院の石の塀について歸つて行くと、よくその邊で町の子供等に逢ふ。電車路の片側に雜貨をあきなふ店々の並んだのが私の眼につく。丁度シモネエの下宿は煙草屋と葬儀社の店の上あたりに當つて居た。葬儀社と藥屋の店の間に挟まれて、下宿と同番地だけの家々へ昇る入口がある。家番の住む中二階のやうな壁に添ふてまた階段を昇つたところに下宿があつたから、三階と言ひさうなものだが、巴里のアバルトマンではそこを第一階に數へてあつた。

「お客さんお支度が出来ましてございます。」

と呼びに来る下女の聲を聞いて、食堂の方へ行つて見ると、何時でも私は話好きな二人の佛蘭西人と若い女の客との間に髪の毛の際立つて黒い大寺君を見た。

私の席はシモネエの同郷のものとかいふ佛蘭西人の隣にきまつて居た。私はそこに腰掛けて、何でも他の客のすることを見習はうとした。洋食も最早贅澤物ではなくて、その日くゝの糧であつた。飲みなれない安い葡萄酒が番茶の代りにあつた。

「君、フロマージュは。」

と大寺君は土地の人達が好むといふ乾酪を私に勧めて呉れた。知らない土地へ来れば、その土地の人達の食ふ物は何でも食つて、それで私は自分の健康を保つて行かうとした。糠味噌のやうな香ひのする佛蘭西風の乾酪をも試みた。

こゝでは食卓に就く時の男と女の位置からして違つて見えた。何と言つてもデンマク生れの女の客が私達仲間の正客で、食卓での談話はすべてこの巴里見學のために北歐から来て居るといふ若い嫁入前の娘を中心にして遣取せられた。日本の言葉と言へば「乃木大將」と「腹切」と「貞奴」しか知らないやうな人達の中に腰掛けて、私は皆の笑聲を聞きながら黙つて食つた。どうかすると斯の人達には日本にあるものと支那にあるものとの區別すらも判然しないやうであつた。それほど皆は私達のことを知らなかつた。

十七

「君はそれでも感心だ。何處へ行くにも左様してベテカを持つて出掛けて行く。巴里へ来たばかりの大抵の旅行者はそれをしない。獨逸人の感心なことには、氣まりの悪いやうな顔もせずベテカを持つて、公園などを歩いてるのによく逢ふよ。」

斯う言つて大寺君は私を勵ますやうにして呉れた。私のベテカは國を出る時に長谷川天溪君から饒別にと贈られた巴里案内記で、外出でもする時には殆どそれが手放せなかつた。

私も全く新規な生活の試みの中に自分を置くやうに成つた。それはこの巴里の下宿に着いてから始まつたことでも無い。あの快よい速力の出るエルネスト・シモンで波の上を走つて来た時から、何方を向いても陸といふものを見ることの出来ない甲板の上に立つて眼を射るやうに青く光る海を望んで来た時から、私はすでにその試みの中に自分を置いた。熱帯の海上はまだ私の眼にあつた。あの光と熱との中にさしかゝる頃からエルネスト・シモンの船客はいづれも甲板に出て眠つたが、私も欄近く籐椅子を持出して、暗い波を流れる青ざめた燐の光を眺めながら幾晩か眠り難い夜を過ごして来たこ

ともあつた。長い船旅の間のことだけでも、私の胸はかす／＼の印象で満たされて居た。斯うした私はマルセエユに着いた時に故國宛の通信を送りたいと思ひながら、あの港の旅館でもそれが果せず、リオンの静かな旅館でもそれが果せず、巴里へ来て漸くすこし落ち着いた頃になつてもまだそれが果せなかつた。一々送る手紙のかはりともして國に居る友達にも読んで貰ひたい、さう思ふ心はしきりに動きながら、國を出てからまだ私は一回の旅の通信も送らなかつた。自分の國を旅すると同じやうにして、知らない土地を旅したい。すくなくもその心で居たい。そんなことを私が思ふだけでも、斯の知らない土地には不思議に休息といふものが無かつた。

大寺君は下宿から近いモン・バルナツスの湯屋へも私を案内して呉れ、『リラ』の珈琲店へも案内して呉れ、ルエキサンブウルの公園へも案内して呉れ、セエヌの河岸の方へも案内して呉れた。サン・ミツシエルの通りの靴屋で靴一足誂へるにも、大寺君は私の案内者だつた。

『あの佛蘭西人は何を君のところへ訊きに來たんですか。』

と私は散歩に出た途中で、連れの太寺君に尋ねて見た。私達は天文臺前から程遠くないルエキサン

ブウルの公園の内を歩いて居た。そこは『小ルエキサンブウル』とも言つて、本公園の方へ通ふ静かな樹蔭と草地の見える場所であつた。太寺君はしばらくマロニエの並木の下に立つて、私達の側から離れて行く素性の知れない男を見送つて居た。

『あなた方は支那人でせうか、それとも日本人でせうか、そんなことを訊きに來た。』

と太寺君は忌々しさうに私に言つて見せた。何故見知らぬ男がそんな事を訊きに來たかは一寸私には讀めなかつた。

『見給へ、あの男は賭をして居るんだ。僕等を支那人に見立てたものと、日本人に見立てたものと居るんだ。何方か負けた方が金を出すんだ。それでわざわざあんなことを聞きに來た。』

斯の太寺君の言葉に思はず私は君と顔を見合せて笑つた。私は太寺君が他から顔をじろ／＼見られるぐらゐる何とも思つて居ないやうな旅慣た様子に感心した。そこへ行くと、町で行き逢ふ男や女の視線を避けやうとするだけでも、私の足は下宿の方へ急いだ。

十八

私はすでにバンテオンの中にあるビュウギス・ド・シャヴンヌの壁畫の前に立つて見た。

同宿の大寺君は經濟學でも修めやうといふ人だけに繪畫の話などはあまりしなかつたが、君の立場から見たルエキサンブル公園にある美術館のことを私に話して呉れた。毎日食堂で顔を合せるデンマアク生れの若い女の客は私がいくらかでも英語を話すことを知つて、めづらしさうに英語で私に話しかけることもあつたが、それも巴里を見物したかといふやうな人をそらさない程度の會話に過ぎなかつたし、傍に居る佛蘭西人同士の話し合ふことは猶更私には解らなかつた。

「そんならお嬢さんはこれから英語で是方とお話しなさるさ。私達は私達で佛蘭西語を話しますから——ねえ、大寺君。」

正席に就いて居るデンマアクの女の客の前で、わざと斯様なことを言つて皆を笑はせる佛蘭西人の言葉が途切れぐに私に解るくらゐのものであつた。食事毎にシモネエも客の相手に出て、食卓の世話をしたり、長い佛蘭西麵麩を切つて出したり、自分でも食べながら話したりした。私には慣れない香のする羊の焼肉、牛乳の入つた伊太利米のお粥、さういふ食物は一切シモネエの手料理だつた。何かシモネエは私に話しかけやうとして、東京の有島君の噂でもする時だけ、ゆつくりゆつくり口を利いたが、この主婦の解り易く言ふことすら極僅かしか私には聞、取れなかつた。それに大寺君は外國人の氣質を呑み込んで居て、皆が佛蘭西語を使ふ食卓の上では、何か私に注意して呉れる場合の外、あまり國の言葉で私に話し掛けやうとしなかつた。

斯うした黙し勝ちな旅行者の境涯から言つても、私はルエキサンブル公園の美術館にあるものを獨りで探りに行きたかつた。そこで出掛けた。

「あ、異人が通る。」

と言ひたさうな眼付をした町の子供が公園の入口に遊んで居た。私はその邊で、小さな帆掛船を手に

提げた二三の子供にも逢つた。

エトランゼエ（異國の人）——といふ気分が私に浮んで来るやうに成つた。よく東京の銀座通りあたりで毛色の違つた人達を見かける度に、異人が通ると思つて見送つたものだが、旅はその私の位置を轉倒した。會て私が毛色の違つた人達に向けた眼は、あべこべに自分の方へ向けられるやうに成つた。今は私の方が異人かと思つた。

ルキサンブルの美術館は公園を出はづれたところにあつて、同じ公園の内にある古い王宮の跡に比べたらすつと新しく出来た建築物であつた。それですら私の眼には可成の古めかしさを感じる。諸國から集まる男や女の旅行者の群に混つて、何程の繪畫と彫刻とがあるとも言へないやうな部屋々々を見て行くうちに、私は一人の少女の圖の掛つた壁の前に行つて立つた。シャヴンヌの筆だ。同じ人の筆で、かねて複製を見た時から心を引かれた『漁夫』の圖がその近くに私を待つて居た。

藝術こそは言葉だ。一目見たばかりの繪畫が旅の私を迎へるやうにして物を言つて呉れた。やがて私が佛蘭西印象派の近代の繪畫ばかりを集めた一室に足を入れた時は、殆ど私は右にも左にも懸けつらね

てある製作の應接に違が無かつた。私は初めてドガの前に立ち、ルノワアルの前に立ち、ピサロオの前にも立つた。あの西班牙あたりの繪畫の影響を受けたかと思はれるやうなのが、あれがマネか。こちらの壁の上にかねて複製で馴染な『海』の圖を見せて居るのが、これがモネか。さう思ふ私は舊知にでもめぐりあつた親しみを覺えた。

高い壁の上にはセザンヌの濛い風景も掛つて居た。まだ私はその部屋で見たセザンヌに心を傾けるところまで行かなかつた。反つて佛蘭西の田舎を描いたピサロオの憂鬱な色彩に心を引かれた。

十九

一步美術館から屋外へ出て見ると、私にはあのマネやピサロオの畫の前に眺め佇立で居た時のやうな心易さが保てなかつた。私の歸路には、公園内の到るところに腰掛けて時を送る人達に逢つた。思

はず私はそれらの人達の前を早足に通り過ぎた。

曾て読んで見たテエヌが英國旅行記の中には倫敦と巴里の公園を比較して、自分等の公園はまるで室内も同じことだとしてあつた。この旅に来て初めて私はその意味を強く感ずる。青々として柔かい草地の展けた公園の一隅へ出て見ると、そこいらにある銅像の前にも、鹿や獅子の銅の鑄物の前にも、紫蘇などをめづらしさうに花と一緒に植ゑてあるあたりにも、到るところに公園の貸椅子を持出して編物や讀書や楽しさうな話に時を送る人達に逢つた。樹蔭を散歩する人達は、と見ると、離れ々々に連立つて歩いて居るものなどは殆ど見當らない。夫と妻、姉と妹のやうな親しい間柄では互に腕を組合せ、男は女を、年若なものは年老いたものを助けるやうにして、共に靜かな歩調を運んで居た。八つか九つの學校生徒までが、そんな幼い年頃からして一緒に並んで歩くことを習ひ覺えるかのやうに、子供同士で公園内の梨島の側を歩き廻つて居るのにも逢つた。全く、あのテエヌの言葉のやうに、こゝにある公園はまるで室内だ。旅の私にはまだ皆と同じやうに是程の屋外の生活を共に楽しむといふ心は持てなかつた。

早く下宿へ歸らう。自分の部屋へ行つて一服やらう。どうしても私はその氣になつた。じろく人に顔を見られるやうな煩はしさから言つても、私の足は急いだ。

私はよく鍵を忘れた。下宿の前まで歸つて行つてよくそれに氣がついた。その度に私が引き鳴らす鈴の音を聞きつけては、シモネエや下女が笑ひながら出て来て、内から入口の扉を開けて呉れた。部屋に戻つても、火の氣一つそこにあるではなかつた。好きな熱い茶がそこに私を待つて居て呉れるでもなかつた。

夕方が来た。私の旅の心は落ちつかなかつた。圓い行燈のやうな石の塔につく天文臺の燈火が私の部屋の窓から望まれた。私はその燈火を眺めて、暮れさうで暮れない夕方を耐へた。

六月に入つて私は小山内君を巴里に待受けた。劇の巡禮者として北歐の方面から順に南へ下つて来る小山内君を斯の土地に見得る日のあるといふことはなつかしい思がした。小山内君は私より先に國を出た人であつた。

私も新しい言葉の稽古に興味を持ち始めた頃であつた。日曜を除いては、毎日語學の教師の家に通つた。ある日もその稽古を済した後で、例のやうに天文臺の前を通つた。何となく動いた町々の空氣が私に異様な感じを起させた。私は下宿に歸つて見て、佛蘭西の三年兵役制が國民全體に布かれるやうに成つたことを知つた。

私達の食卓でもその話で持切つたやうであつた。その晩、私は自分の部屋の窓から町を徘徊する佛蘭西龍騎兵の姿を見かけた。あの古代羅馬の兵士でも想ひ起させるやうな金兜を着けた龍騎兵がボオル・ロワイアルの通りを警めるものと知れた。ふと、物凄い群集の揚げる聲が窓の外に起つた。さかんな佛蘭西國歌を歌ふ聲だ。一人の旗手を先登にして、石造の街路を踏んで行く無数の人が其後から續いた。私も殆んど直覺的にそれが示威運動であることを覺つた。激した群集の一人でも無意味な破

壊を企つるやうな者は無かつた。並木の枝一つ折らうとするものも無かつた。そこには唯、團結した意志の強い表白があつた。多くの婦女が列の中に混つて居るといふことも餘計に其行動を深刻にして見せた。旅の窓から、私も初めて斯様な光景を目撃した。

その翌日になつて、私は前の晩に見た佛蘭西人の示威運動が三年兵役制に對する反對側であつたのか、それとも賛成側であつたのか、その判別に苦しんだ。何故といふに賛否二様の運動が同夜に行はれたといふことを聞き知つたから。それ程私も土地不案内だつた。唯隣國獨逸の壓迫がこの土地に加はりつゝ、あるといふことだけは明かに感じられた。

私は倫敦から着く小山内君を心待ちに待ちながら、部屋の用意のことで一寸大寺君を見に行つた。小山内君から頼むと言つて來た私の下宿には、客の一人や二人増えても困らないほどの食卓はあつたが泊める部屋がなかつた。それを私は大寺君からシモネエによく相談して貰つた。

「言葉の出来ないといふやつは全く不便ですね。こんな時に早速困る。」
と私が言つて見たら、

「なあに、解らない中がい。皆の言ふことが解るやうになると、嫌になつちまう——」
斯う大寺君は言つて、更に嘆息するやうに言葉を繼いで、

「そりや君、語學の教師だらうが下宿のおかみさんだらうが、金、金だ。金の有難味はこつちの人間の骨までしみ込んで居るからね。」

二十一

小山内君は露西亞あたりの藝術家のやうに髪を長くして、質素な旅人姿で、豫定よりはいくらか遅れて私の下宿に着いた。

佛蘭西人の普通の挨拶は初対面の場合でも極く簡単に「今日は」と云ふ言葉で済ませる。シモネエはその「今日は」で、客を迎へる主婦らしい手を小山内君の方へ出した。その手を軽く握つて挨拶す

る小山内君の旅らしい様子を見ることすら、私にはめづらしく思はれた。私達の食堂は半分應接間で、壁の上と言はず暖爐の側と言はず古い銅版畫の大小の額などがごちやごちやと掛けてあり、模様のない古い皿の類までが壁を飾る額のやうに並べられるだけ並べてある部屋であつた。佛蘭西風の眞黒な服を着け古い銀貨を胸飾りとしたやうなシモネエは食堂の戸棚を開けて、馳走振りの珈琲茶碗を取出したり、小皿を拭いたりして居た。斯の食堂で私は小山内君と久しぶりの顔を合せた。私の方でめづらしかれば、小山内君の方でもめづらしかつた。私が着慣れない洋服などを着て居るのも、おそらく小山内君の眼には、初めてであつたらう。小山内君が着いたと聞いて大寺君も入つて來た。私は大寺君に小山内君を紹介した。

小山内君がモスコウやベルリンを始め到る處で歴訪した劇場の話、其他種々な旅の話を持つて來た頃は、巴里にある劇の一季節も終りに近かつた。めほしい劇場の中には既に閉つたところも有つた。まだ私は巴里の芝居といふものも覗いて見なかつたから、いつそ小山内君が着いての上にしやうと思つて、一つはそれを楽しみに君の來遊を待受けて居た。シモネエの世話で、君の寢泊りする部屋は三

階のテッシユさんといふ婦人の家にとつてあつた。下女はもう廊下にある荷物を三階の方へ運んで行った。

『へえ、これが有島君ですか。』

と小山内君はしばらく休んだ食堂の出がけに、丁度その出口の壁の上に掛つて居る静物の油繪の額を見上げて、好いとも悪いとも言はずに黙つて眺めて居た。有島君がそれをシモネエの家に残して置いて行つた頃の勉強時代は、まだ若若しい筆觸にもあらはれて居た。夕飯過ぎから小山内君は私の部屋の方へ來た。私は暖爐の方から赤い蓋の洋燈を自分の机の上に移した。

『巴里も舊弊なところですね。今だに洋燈ですぜ。』
と私は言つて見た。

私達は燈火の側に腰掛けて互に旅の心を比べ合はうとした。そこへ大寺君も部屋の扉を軽く叩いて入つて來た。寢臺から洗面臺まで置いてある部屋の内では椅子三つも狭苦いくらいであつたが、私達

はその究屈さも忘れて話し込んだ。私にはまだ斯の旅窓から望む都のことを何とも言つて見ることは出来なかつたが、こゝにあるものは随分行き詰まつたものといふ氣がする。そんな印象を大寺君や小山内君の前へ持出した。

『なにしろ、巴里には仕事も何も出来なくて、動けなくなつて了つたやうな人があると聞いて來ました。』

と小山内君は私に言つて見せた。

長い月日の留學に慣れて最早この土地にめづらしいと思ふこともないやうな大寺君と、モスコウやベルリンを見た眼で旅の序でに巴里を覗いて行かうとする小山内君と、私と——斯の三人が一つとこ

ろに集つて見ると、昔の人の口吻を借りて言へば、私達は思ふことも三つで、旅の夢も三種であつた。巴里に着いた翌日から小山内君は開場中の芝居を探らうとして、まづオペラ座の切符を買ひに下宿を出て行つた。勝手を知つた小山内君でも二枚の切符を手に入れるに小半日かゝつたといつて、汗を拭き拭き戻つて来た。そしてその一枚を私に分けて呉れた。小山内君は獨逸の方で見損なつた「ファウスト」を斯の蘭佛西の舞臺の上で見て行きたいと言ひ、私としても「ファウスト」の作曲家グノオはかねて自分の耳に親しい名であつた。宗教と藝術との心の戦ひを一つの生涯に戦ひ續けたといふあの作曲者が佛蘭西人であることから言つても、斯のオペラは巴里で見たかつた。小山内君は殆んど二日掛りで開場の當日に私を誘つて呉れた。しかしその夜の「ファウスト」には私も失望して歸つた。

「今度おいで下すつたお客さんは何をなさる方ですか。」

シモネエは食堂で小山内君のことを私に尋ねた。

「まだお若い方のやうですねえ。」

と復たシモネエは言つて、私が片言まじりに話し聞かせ、ことを半信半疑のやうに受けた。めつたに

巴里の芝居を見たことの無いやうな斯の主婦は、佛蘭西のたりの舞臺監督といふものに小山内君のことを想ひ比べるやうな眼付をして居た。

「ほんとに、日本の方のお年齢ばかりは、私にはよく分りません。」

私達が外國人に向つて言ふやうなことを、シモネエは私に言つた。

小山内君はまた半日掛りでシャンセリゼ劇場の切符を買に行つて来た。その翌日も私達は連れ立つて出掛けた。丁度小山内君のモスコウ滞在中にも見られなかつたといふ露西亞の舞踏家ニジンスキイ一行が巴里の舞臺に上る晩であつた。それがまた新規に出来上つたばかりのシャンセリゼ劇場の舞臺開きの晩にも當つて居た。巴里人が誇りとするといふシャンセリゼエの大街路まで行くと、右からも左からも飛んで来る無数の自動車が慣れない私を脅かした。「まるで生命掛けですね。」そんなことを私は小山内君に言つて笑ひながら、あのエトワアルの凱旋門に續いた廣い街路を横ぎつた。そして巴里には珍しいセツセツシヨンの新劇場の前に着いた。白煉瓦の建築物を照す一列の電燈が六月の夜の並木に映るのを見上げたばかりでも、新しく爽かな藝術の世界の中へ入つてゆく思ひをさ

せた。フォーキンの調節に、バクストの背景に、ニジンスキイ及びカルサギナ夫人等の舞踏に、その晩は私も蘇生つたやうに成つた。

私達が下宿をさして歸つて行つた頃はもう遅かつた。食堂の燈火も消えて居た。私は小山内君を自分の部屋に誘はうとして、扉を開けて見ると、そこも眞暗だつた。

『待つて呉れ給へ、今燈火を點けますから。』

マツチの火で暖爐の上の洋燈を探りに行くと、油も殆ど盡きかけて居た。私は更に自分の寢臺の方へ行つて、枕許に置いてある蠟燭を持つて來た。それに火を點けて部屋の内を明るくした。

『何か飲むものは有りませんか。生憎こゝには何も進げるやうなものが無い。』

さう言ひながら私は主婦も下女も最早やそれ〴〵寢部屋の方に引つこんで居るのに氣がついた。火鉢もなく、鐵瓶もない私の部屋では、水でも勤めるより外に小山内君に出すものもなかつた。私達はそのまま別れて寢臺に上れさうもなかつたし、寢ても直ぐには眠れさうもなかつた。

『今頃巴里で蠟燭を點けて、水を飲みながら話して居やうとは——國の方でも思ひますまいなあ。』

斯う小山内君は言つて、蠟燭の火に映るコップの水を呑み〴〵、それからまた更に遅くまで話し込んだ。

二十三

『小山内君、これが國の方だと、早速新聞社から君の寫眞でも撮らせて呉れなんて言ひに來るところですね。日本で自由劇場を興して初めてイブセンを舞臺にかけた人が巴里に來たなんて言つたつて、誰もそんなことを知らうとするものも無い。こつちの人はさうこせ〴〵しないんでせうか。』

『そりや僕等ばかりでも無いんでせう。ブランドスのやうな人が巴里に來た時だつて、さう言へば知られずに居たんでせうから。』

『われ〴〵の國の方のことは、今の有様は君、何一つこつちの人には知られて居ないやうですね。僕

等はもうこんなに歐羅巴といふものに親しくなつて居るやうな気がするのに。」

『露西亞の方の人もさういひましたよ。露西亞といふのが歐羅巴に知られたのも、自分等の藝術が知られてから後のことですよ——』

私は小山内君と二人で、部屋から天文臺の塔の見える窓の側に立つて、二人ともほそ／＼とした聲で斯様なことを書生流儀に話し合つたこともあつた。

小山内君は二度もシャンセリゼ劇場の切符を買ひに行つて來た。それ程君はあの露西亞の舞踊劇に興味を持つて居た。その度に私も君のお供をした。前の晩と違つて、私達は本當の芝居好とでもいふ人達の中に混つて、それほど窮屈の思ひもせずに見物することが出來た。小山内君は例の調子で、『安いところで好く見て來なけりや黒人とは言へないんです、』と言つて笑つた。モウリス・ドニの新畫で飾られた高い天井の下で、私達は人の思想や情熱が全く言葉の力を借りることなしに流れ出して來て居るやうな新しい舞踊を見た。その晩はニジンスキイはダフニイに、女優カルサギナはクロオエに扮した。

私達の芝居見物は讀みたいと思ふ書籍でも買つて讀むやうなものだつた。興行中の芝居を知らせる爲にのみある町々の廣告塔には、丁度シャトレエ劇場で演ずるといふ『ピサネル』のことも貼出してある頃であつた。ダヌンチオの新作だ。シャトレエは私達が下宿する町の方面からセエヌ河を渡つて行つたところにある電車の交叉點で、そこまでは歩いても知れたものであつた。私は小山内君と連立つて女主人のピサネルに扮するルウビンスタイン夫人の舞臺をも見に行つた。全く、『ピサネル』はあの女優一人のために書かれたと言つてもいゝくらの芝居であつた。佛蘭西風の舊俳優が多勢その周圍を取りまいて居た。その中には小山内君のいふ『歌六』そのまゝのやうな調子の俳優すらも混つて居た。何と言つても小山内君はモスコウの藝術座最良であつたから、シャトレエ劇場を出てからも頻に首を傾けて居たが、しかしあの一人で舞臺を背負つて立つて居たやうな美しい人は私達の眼に残つた。

小山内君の旅も可成りいそがしかつた。君の巴里滞在は九日ぐらいしか豫定の日取りがなかつた。その八日目の夕方あたりには、來たと思ふ人ももう送らねば成らないやうな、そんな心持に私も變つて

行つた。小山内君はこれから國を指して遠く歸つて行く人だ。それにつけても私は獨りこの異郷に留る思ひを深くした。

二十四

巴里の六月は思つたより涼しい。大寺君の話によれば、こゝには全然梅雨といふものも無く、随つて梅雨晴の暑さも知らないとのことであつた。そのかはり日は國の方より遅く暮れた。旅の空で互に別れのこゝろを盡す爲に、小山内君と大寺君と私とはある咖啡店に居た。そこは私達の下宿する町の界限が人通りも少なくひつそりとする時分に、まだ背の口のやうなモン・マルトルであつた。土地の事情に精しい大寺君の案内で、夜の十二時から開く咖啡店に時を送るといふだけでも、旅らしい氣持がした。小山内君はモスコウの方で暮した日が樂しかつたと見えて、私を見るとよく藝術座の噂が出

て、毎日學校へでも通ふやうにあの劇場へ通つたことや、しまひには座員とも懇意に成つたことや、日頃君が好きなきエホフの未亡人に逢つて來たことなどを私に話して呉れた。私としても小山内君を見る度に思ひ出すやうな東京の方の友達の噂を斯うした場處でして見たいと思つたが、騒がしく聞えて來る音楽は思ふやうにそんな話をさせなかつた。鳥の羽からも獸の毛皮からも身を飾らうとする女の群に混つて、短い踊の衣裳を着けた一人の女の風俗は際立つて強い色彩を放つた。私達が腰掛けて居る地下室の一隅には西班牙の踊が始まつた。私はマルセエまで來る航海の途中にボオト・セエドの港の方で既にその踊を見て來た。あの時は船客一同が碇泊中の船に來る親子三人の伊太利の藝人を取り圍んで、長い船旅の無聊を慰めた。男の親は唄、女の親はマンドリン、それに拍子を合せて娘が西班牙の踊を踊つた。短く切り下げた髪、振り鳴す鈴、激しく踏む少女の靴の音、あの時の記憶が復私の眼前に歸つて來た。斯うした咖啡店で西班牙の踊でも踊らうといふ女は亞拉比亞趣味ともいひたいほど異様に着飾つた風俗の點で、もとより船へ來る藝人などと比較にも成らない。それにしても私の眼に映る踊り子は年を取り過ぎ、肥り方も卑しく、あの船で見て來たやうな伊太利の娘のあはれさ

には思ひ比べられなかつた。

私達が其の咖啡店を離れた頃はまだ音楽が絶えず聞えて居る位の時であつたが、屋外へ出て見ると空は白みかゝつて、暗い町の中をとほとほと動いて行く人々の影も見えた。間もなく私達はそこいらに客待ちする辻馬車を見つけて天文臺の方角へ歸つて行つた。時とすると、野菜を積んだ大きな馬車が幾臺となく行方の薄暗い街路に續いた。中央の大市場へと通ふ荷馬車だ。さすがに短か夜の感じがした。まだ朝の響の起らない拂曉がたの町々を車の上から見て行くとまうマデライシの寺院の附近へ来た、もうコンコルドの廣場へ来た、と大寺君は私に言つて見せた。馬車はコンコルドの石橋から、長く續いたサン・ゼルマンの通りを進んで行つた。次第に空が明るくなればなるほど、私達は親しみのある町々の方へ歸つて行つた。

私達が産科病院の前まで引返した時はもう朝だつた。其邊には町を掃除する人夫や、早起きの果物屋の亭主などが朝らしく立ち働いて居た。馬車の停つた並木の下あたりには下水と一緒に流れて行く掃溜めた塵芥が私の眼についた。私達の下宿へ昇る入口の門も開いて居た。

『すつかり夜が明けましたね。』

と私は半分獨語のやうに言つて見たが、小山内君の巴里滞在もその日一日だけだつた。

二十五

午後から私は小山内君と二人で巴里の學生町ともいふべきサン・ミッシェルの通をバンテオンまで歩いた。國の方に残して置いて來た子供等のために玩具なりと町で買求めて、それを小山内君に託したいとも思つたからで。

バンテオンはドレフユウス事件と共にやかましかつたゾラの埋葬地として、あの當時の傳へ聞いた記憶はまだ私にも残つて居る。來て見ると、佛蘭西歴代の名高い政治家や軍人ばかりでなく、ブルテエル、ルウソウ杯の遺骨はそこに納めてあつた。私がそこへ小山内君を誘つたのは、もとよりシャヴ

ンヌの壁畫を見るためであつたが、しかしあの畫家の描いた壁がバンテオンの全部でもない。歴史畫、宗教畫、戰爭畫などの煩はしく見るに堪へないやうなものが寧ろ堂内の大部分を占めて居る。その中には宗教的獻身者の首の飛んだ畫もある。中世紀風の暗い殘虐性がそんな宗教畫の効果を助けるために壁を彩色つたところさへある。さういふ壁つゞきの畫の中に、シャヴンヌの筆になつた聖ジュネキエーブの一代が描かれてあつた。バンテオン詣でも言ひたい人達の中に混つて、私達はあるの尼さんの生立ちを描いた幼時の傳説の圖から見て廻つた。その廻廊に上ることは私としてはもう初めてもなかつた。しかし私は見る度に深い靜寂な心持を経験した。射し入る光線の具合でそのあたりの廻廊のいくらか薄暗かつたことも、それほど苦には成らなかつた。そこには題目として撰ばれた勞働がある譯でもない。しかし、觀る人の誰しもがそんなことに氣つきもせず感じもしないほど、それほど自然な感謝の氣分をもつて幾多の人の働く光景が畫面の中に取り入れてある。その壁には鶏を飼ふ子供が居た。羊の乳を絞る女が居た。帆柱に倚りかゝる漁夫が居た。

巨大な石造の堂宇の中央にある圓天井からは午後の日が強く奥の方の壁の上に射して來て居た。私

達が廻廊づたいにその明るい壁の側へ出た時は、そこで見るシャヴンヌの畫の一部が鮮かな色に光つて居た。隊を組んで高い天井の下を見て廻る旅らしい風俗の人達が廻廊を通るのにも行き違つた。案内人に連れられた見物の一隊が向ふの石の柱と柱の間を黒く動いて行くのも見えた。淡い黄ばんだ月に對つて立つて居る晩年の尼さんの壁畫の前で、しばらく私は旅の身を忘れて居た。

小山内君は堂の出口で、婆さんの賣つて居る繪葉書などを求めた。記念に求めて行く人も多いと見えて、そこではいろいろ大きな書きの寫眞に壁畫を撮つたのを賣つて居た。油繪にした小さな模寫までも賣つて居た。

二十六

北の停車場から小山内君は遠く歸國の途に上つた。復た何年か巴里を見ることも出来ないかと思へ

ば名残惜しい、そんな言葉を残して置いて、小山内君は發つて行つた。君は來る時も北、歸る時も北で、今度もベルリンからモスコウを経ての西伯利亞廻りだつた。出發前の小山内君で、矢張その道の人だと私は思はせたのは、君が旅の鞆から舞臺用の鬘の出で來たことであつた。君は國の方の人から頼まれて巴里でそれを求めたと言つて、老人の役に扮する時の俳優の冠りさうなやつを私に取出して見せ、鬘のあたりに附着する赤ちやけた毛などを私に撫で、見せたが、あの鬘も私の眼に残つた。人を送つた後の寂しい心持で、私は自分の部屋の椅子に腰掛けて見た。私の腰掛ける椅子は唯の物敷奇や、一時の休息や、または日中だけの仕事にある椅子ではなくて、最早折り曲げることも坐ることも無い自分の膝のための椅子であつた。部屋には、寢臺の下のところの薄毛氈が敷いてあるだけで、その他は板敷の床になつて居た。その床もまた、疊の代りにある板敷であつた。長いこと靜坐する癖のついた私のやうなものに取つては、否でも應でも舊い習慣を捨てねば成らなかつた。この旅に來て思出す。神戸からマルセユまでやつて來る船の中で、私はある支那人の家族とも一緒になつて見た。香港を出てからのことであつた。船には白い支那服を着た五、六人連れの廣東人も見えたから、

私が一緒になつた支那婦人の容も矢張新嘉坡まで見物に出掛けるといふその一行であつたかと思ふ。あの人達が涼しい風を納れに來る時にはつゝ、まじやかに西洋人の間に腰掛け、骨の細い支那風の扇などをひろけてつかつた。私があゝの深窓に育つた東洋の婦人らしい人達の髪や、腕輪や、支那風の刺繍のしてある小さな女靴を佛蘭西船の甲板の上で見かけるのも、左様いふ時だつた。中には娘らしい前髪をさげ、いそぐと甲板の欄の方へ行くまだ年の若い人もあつた。しかしあの人達は何時の間に甲板から姿を隠すやうにして、蒸し暑い部屋の方へ行つては船床の上に横になつて居た。私は巴里の下宿へ來てからもよくあの人達を思ひ出す。同じ東洋から來た私は『家』といふものに對する根深い執着の似より見つけて、自分ながらほゝゑむことがある。斯うした旅の心から言つても私の部屋は、まだほんの假の部屋だつた。

夜になると、私はもつと斯の歐羅巴の生活に入り得る時であらうと思つて、それを樂みに寢臺に上つた。何處から來るとも知れないやうな南京蟲がよく私の寢臺へ這ひ上つて來た。

二七

小山内君が発つて行つたあとで、私は旅行者としての初めての経験を一つした。私が小山内君の歸國を見送つたのは北の停車場であつたが、あの停車場の混雑と發車間際のあわただしさの中で小山内君が兩替屋から知らずに受取り、私がまた小山内君から知らずに受取つて來たものは、後で私が町へ買物に行つて見ると、通用しない贋金と分つた。

私にはこれが小さな経験で済んだ。しかし小山内君があつた五法の銀貨は幾つもあつたやうだから、さだめし途中まで行つて意外な思ひをしたことだらう。その話を私が大寺君にする

と、
『それ見たまへ』

と大寺君は言つて、佛蘭西人が文明の中心として誇る巴里の都にも何程の贋金と賄賂とが行はれて

居るか知れないといふことを私に話して呉れた。

斯うした旅の空では些細なことが私を慰めた。時々私は噓が出て、それが止らないで困つたこともあつた。下宿の主婦は風土の相違から起つて來ることだらうと言つて、佛蘭西風の煎じ薬を熱くしてはそれを私に勧めて呉れた。『チザン』と言つて、時候あたりに皆が飲むやうな煎じ薬はこの土地にもあつた。そんなものを温めて貰つて飲んで見るやうな、些細な事からでも私は慰められた。さういふ場合のシモネエほど佛蘭西の田舎出の昔氣質な婦人らしい氣のすることもなかつた。

ボオル・ロワイアルの並木街に接した私の部屋の窓の外では、夜の九時といふと人通りもすつと少かつた。十時には階下の家番が門の扉を閉めた。それより遅くなつて屋外へ出やうとするものは家番へ聲を掛けねばならず、屋外からまた歸つて來るものは門の際にある呼鈴の引金を引かねば成らない。ある晩、私は部屋に居て、その呼鈴の激しく鳴る音を聞いた。それを聞いて私は家番の夫婦ももう寢入りばなの頃かと氣がついた。六月とは言つても私が部屋着にするつもりで國から持つて來たフラネル一枚では寒いくらゐるの晩で、私はその上に拾羽織を重ねて、めづらしく寛潤な和服の着心地を樂み

ながら獨りで部屋の洋燈に對つて居た。ふと私は階下の方で門の扉の開く音を聞きつけた。暗い壁づたいに階段を踏んで上つて来る人の蹠音は私の部屋に居て聞えた。その蹠音がぱつたり止まつたかと思ふと、しんとした下宿の廊下へ響けるやうな鈴の音がした。平素ならシモネエか下女が寢部屋の方から蠟燭を持つて出て来るところだが、皆よく寢込んで居た。洋燈を私に手にして行つて、入口の扉を開けて見た。

『君か。』

思はず私が聲を掛けると、鍵でも忘れたらしい大寺君が笑顔を見せながらそこに立つて居た。

大寺君はそのまゝ自分の部屋の方へ行かないで、

『まだ君は寝ないで居たのか。』と言ひながら私の部屋へ入つて来た。

『今夜はひどい目に逢つた。二十分も門の外に立たせられた。いくら引金を引いても、なか／＼コンシエールジ(家番)が起きて呉れなくてね。』

僅の間の同宿に、大寺君はこれほど心易い調子で私に話すやうに成つた。その晩の大寺君は帽子を

手にしたまゝ私の前に腰掛けて、いつにない深い溜息を吐いた。君は長い外國生活から何時の間にか自分の學問の荒んで来たことを嘆息するやうに言つた。私はよく君の口から、自分等の國は駄目だといふことを聞くし、何一つ日本に好いものがあるか、何一つ世界に向つて誇るべきものがあるかといふことも聞く。左様いふ強い大寺君よりも、私は反つてその晩のやうな弱い大寺君をなつかしく思つた。

二十八

やがて七月十四日の共和祭を迎へるころには、大寺君は白耳義の旅を思ひ立つて、それを機會にシモネエの下宿を去つた。巴里人の儉約なことを私に指摘して見せ、食ふことから着ることまで旅する方法をいろ／＼と私に教へて置いて行つて呉れたのも大寺君であつた。君の聲は最早私達の食卓では聞かれなかつた。

巴里にある競馬場の閉ざされる頃から、避者などに出掛ける人も多く、音楽會は休みになり、芝居はあつても國の方でいふ盆興行のたぐひで、都會の夏のひつそりとして居ることは、何處も變らなかつた。私の語學の教師もブルターニュの海岸の方へ出掛けた。祭の日が来る頃になつて見ると、同宿のデンマアクの女の客も國へ歸り、いつも食堂で落合ふ話好きな佛蘭西人も一人減り、二人減りして、何となく食卓の周圍までが暑中らしく淋しくなつた。

私は獨りで自分の部屋の窓へ行つた。眼前にある石の町には何一つ國の方の盃盆會を思出させるやうなものは無かつたが、でも私は草市の立つところかと思ひやつて、その足で下宿を出て見た。段を一つ降りたところに住む家番のおかみさんは勝手口に立働いて居て、私を見ては聲を掛けるやうに成つた。壁に添うて今一つ階段を下りたところにある門の出入口には、三人ばかりの子供が遊び戯れて居た。一人は家番の子息だ。中には私を見ると「日本人、日本人」と小聲で言つて、傍へ寄るのも氣味悪さうにして居る女の兒もあつた。その女の兒まで短い上衣に、輕脛を出して、子供らしい編上の靴といふ風俗をして居た。私は近所の菓物屋で子供の悦びそうな佛蘭西風の干菓子などを賣つて居る

のに氣がついた。その店から小さな袋入りのチョコレートを三つばかり求めて來た。

『私も國の方にはお前さん達のやうな子供を残して置いて來ました。』

こんなことを言つて一袋を一番年少らしい女の兒の前へ持つて行き二袋を家番の子供とその遊びの友達に分けた。

『貴方にも子供があるの？』

斯ういふ家番の子息の言ふことぐらゐるは私にも聞取れるやうに成つた。

旅の私のところへも初めての祭が來た。細い花輪の様な色紙の飾りは私の部屋の窓の外にも垂れ下つた。幾臺となく車で運ばれた簡便な椅子や食卓は町角の粗末な珈琲店から並木の下へかけて人道の狭められるほど澤山に並んだ。私は屋外へ出て見るまでもなく、自分の部屋に居ながらでも、無造作に綠葉で飾つた奏樂の假小屋の前あたりを往來する男女や、腰掛けて休む人達や、戯れ廻る子供などを直ぐ眼の下に眺めることが出來た。この祭を樂みに働いて居たやうな人達は、男女の勞働者から洗濯屋の娘、下女なぞまで夕方から舞踏の仲間入に集まつて來た。夜に入つて子供の玩具にする色煙花な

ぞは一層この賑かさを増した。七月十四日』の前の晩から、町の人達は踊り狂つた。野蠻に響く喇叭やクラリオネットの合奏につれて、夜の二時過になつてもまだ多勢の足拍子の音は絶えなかつた。

二十九

この祭が来る頃までは、私は自分の下宿する町の界限に親しみらしい親しみも持つてなかつた。町の入口には『七月十四日、オーケストラ』とした額が掛り、並木の間には小さな紅い提灯などが吊るされたのを見ると、私のやうな旅のものまでが何となくお伽話のやうな氣分を唆られるやうに成つた。『いかゞでした。昨晩はよく眠れましたか。』

とシモネエは言つて、自分の下宿に部屋だけ貸して居る佛蘭西人のことを私に話した。この佛蘭西人は控訴院へ出る護辯士とかで、朝早く事務所の方へ出掛けては、日が暮れてから歸つて来る人であ

つた。

『今夜は彼の方も他へ逃出すそうです。到底あの騒ぎでは堪りません。』

とシモネエは私に話して笑つた。その十四日にはシモネエも食堂を綺麗に片付けて、客をして遊ぶと言つて晝飯の時に行つて見ると二人の娘が呼ばれて来て居た。一人はまだ十六七ぐらゐに見える娘で、母親に連れられて近郊から祭を見に来たと言つて居た。一人は小山内君に部屋を貸した三階のテツシユさんであつた。私には斯のテツシユさんのやうな娘が下女も使はずに獨りで三階に一軒借りて暮して居るのが不思議で、巴里はいろ／＼な人の居るところだと左様思ひましたが、テツシユさんの右に嵌めて居るのは義手だと分つてから、いくらかその謎が解けた。テツシユさんは物を食ふにも左の手でやつて居た。私は巴里の風俗を眼前に見せて呉れるやうな若い娘達や年とつたシモネエの話を聞きながら一緒に晝飯をやつた。

食後に、私は食堂の窓へ行つて見た。こゝでは町を呼んで来る金魚賣もなく、軒に掛る釣葱もなく、蟬一つ鳴かない。でもシモネエが食卓の布を取換へ、植木鉢を据ゑ、ドミノなどを取出して娘達を樂

しまして居るところを見ると、さすがに夏の祭らしい気がした。シモネエは下女を臺所の方から呼び寄せて、三本脚のついた器械でいろ／＼な占ひ事などを始めた。どう見ても國の方でいふ『コックリさん』だ。私はシモネエが日曜毎に着物を着更へては缺かさず寺院の禮拜に出掛けるのを見掛けたが、この信心深い婦人が『コックリさん』を取出さうとは思ひがけなかつた。

町では復た例の音楽と舞踏が始まつた。夕方から私も屋外に出て、家番の家族と一緒に腰掛けたり、多勢の中を歩き廻つたりした。平素は奈何いふ人達が住むとも知れなかつた下宿の同番地の階上の方からは、いろ／＼な家族が降りて来た。身體も縮み脊骨も踊まり杖に倚つて僅に歩くやうな男までが腰を曲けながら降りて来た。姉妹かと思えるまだ年若な娘達も降りて来て、私の見て居る前で手を取り合つて踊つた。どうかすると家番のおかみさんまで舞踏の仲間に入つて行つた。その晩は珈琲店の主婦も、洗濯屋の娘も、下女も、さういふ差別がなかつた。あるひは男と女あるひは女と女といふ風に、二人づゝ一組になつた踊り手が一團の享樂の世界を形造つて居た。

その翌日には夏らしい雨が来て町町を濕した。ボオル・ロワイアルの通りには騒がしい荷物車や自

動車の響も絶えて、ひつそりとした祭の後の雨の中を濡れて行く人も見えた。靴一足徴びたことも無いほど乾燥した巴里の町の空で、斯の靜かな雨が私の旅の窓へも来た。窓の硝子に映るプラタアヌの並木も濡れて、その葉からは涼しい雫がしたゝり落ちた。

三十

巴里に来て二月日あたりから漸く私は國の方の新聞紙宛にほつ／＼通信を送り始め、五月目あたりには同じ旅でもいくらか落着いた心持でそれを送ることが出来るやうに成つた。これは東京朝日の山本松之助君に約束して来たことを果たしたからではあつたが、やがて夫が自分自身を助けることにも成つた。そのために私は慰められもし勵まされもした。曾てこの國の作家が藝術の都、文明の泉源、風俗の中心、流行の中心として誇つたといふ都は一日は一日より私の眼に展けて行つた。私は次第に

形をあらはして来る山々でも望むやうにして、日に／＼自分の狭い眼界に入つて来るもの、輪廓を旅の窓から望み見る思ひをした。國の方では想像もつかなくやうな規律ある社會生活、眞に餘裕の多い佛蘭西人の態度、一切の事物を覆ふ數理的な組織、金錢のみに限られない佛蘭西的貯蓄心、一面にはまた驚くばかりの貧富の懸隔――

夏の半になる頃から私は町の角にあたる部屋の方へ移つた。そこはデンマアクの若い女の客が占領して居た部屋で、以前の食堂の隣から見ると住心地も好かつた。窓が二つあつて、一方を開けるとブラタアヌの並木の葉が窓に近く見え、一方の窓は丁度建築物の角にあつてボオル・ロワイアルとサン・ジャツクとの町の交叉點が眼の下に見えた。若葉の美しかつたブラタアヌが濃い綠葉に變り、やがてそれが黄ばんで来た頃になつて見ると、私もいくらか斯の旅の生活に慣れて来たことを感じた。私はあの「慣れるといふことばほど恐ろしいものは無い」と言つたフロオベエルの言葉をよく思ひ出した。それから又、

「慣れるといふことは吾等に與へられた自然の恵みである」と言つたあのドストイエフスキイの言葉

をもよく思ひ出した。所詮私達は慣れずには居られない。私がこゝに下宿した當座のやうに、何一つ贅澤を願はうではないが、せめてあの日本の疊の上で思ふさま斯の身體を横にして見たいと思つたやうな、あんな心持が続いて行くとしたら奈何だらう。過ぐる五箇月ばかりの旅の間、日がな一日私は立ちつゝけに立つて暮して居るやうな氣ばかりして、時には子供のやうに泣きたくなることすらあつた。それほど舊い習慣から離れることの出来なかつた私でも、漸くすこし椅子に慣れて、どうやら腰掛けて暮せるまでに成つた。慣れて見れば高い町々の建築物なども左程氣にならなく成つた。石造の街路から起る怖ろしいやうな町の響までが左程耳にもつかなく成つた。

しかし、私が眞にエトランゼエとしての自分を斯の異郷に見つけたのも、矢張その頃からであつた。私は既に旅でめぐりあつた同胞を數へて見ても、コロンボの港以來の松山君、リオンの濱崎君、藤井君、巴里へ来てからの大寺君、小山内君があるばかりでなく、大使館の書記官で東京の柳田君の舊い友達だといふ菊地君とも識合になり、夏から秋へかけてはまた斯のシモネエの下宿に居て澤木、郡の二君を迎へたり送つたりした。澤木君の紹介で、私は畫家の山本鼎君をも知るやうに成つた。この山

本君を通して巴里に在留する同胞、殊に美術家仲間と顔を合せるやうな機会も多くなつて行つた。海外にある旅行者の群——それからそれと手を引き合つて互に長道中の連れとなつて行くやうな自他の姿が、おのづと私の胸に浮んだ。

三十一

『羅馬をよくみやうとするには、三日を好い社會の中に、三日を孤獨の裡に送つて見ねば成らない。』とスタンダアルは言つたとやら。巴里を見るにも、此言葉は當嵌ると思ふ。しかし私の旅の境涯で三日を好い社會の中に送つて見るといふことは思ひも及ばなかつた。私は自分の下宿から遠くないノートル・ダムの分院などを訪ねて、そこで彌撒の儀式的行はれる間、皆と一緒に腰掛けて來ることもあつた。時には巴里のフィル・アーモニック會の催しでイザエの音樂會のあることを知つて、ガボオの音

樂堂などへ出掛けることもあつた。それとても私があの羅馬舊教の寺院の内部の靜かさを愛するためや、又はあの北歐から來たギオルニストの質實剛健な風采に接して見たいためばかりでなく、せめて私は間接にもそれらの寺院や音樂堂に集まる人達と共に時を送つて見たいと思つたからで。巴里に來てから、私は純粹な佛蘭西風の三四の家族をも知るやうに成つた。巴里國立圖書館の書記モレル君、コレツジ・ド・フランスのレイイ教授、セエヌ河の岸に住む詩人リエーブル君、彫刻家のジュバン女史、それらの人達の家々では茶の會に集る種々な佛蘭西人の男や女の間を私を呼んで呉れたり、時には家族だけで一緒に食事をしたいからと言つて招きの手紙を呉れたりした。『巴里にある純粹な社會に近づくことは、異國の旅人としては容易でない。』とあの神戸から來がけに船中で一緒になつた佛蘭西人の技師が私に話し聞かせたことも思ひ當つた。それにつけても、私は斯ういふ機會を自分に與へて呉れた東京のサラソン嬢や有島君の厚意をうれしく思つた。殊にサラソン嬢とは從兄弟の間柄といふモレル君の家の人達は、書齋から寢室にまで私を案内して、歸道には電車の乗場まで夫婦して送つて來る程の身にあまる親切を見せて呉れた。

モレル君が住居のあるところはビョンクウルといつて、巴里でも郊外の方のセエヌ河の岸にあたつて居た。その家の方から、時に河蒸氣、時に電車で歸つて來て見る度に、今の下宿の汚れた壁や暗い廊下などがひどく私の眼についた。どうして、國に居る思ひをすれば、今の下宿の食事だけでも私の口には過ぎたものだ。夫で居ながら、國の方に居る時よりも、ずつと私は貧しい思ひをするやうに成つた。

『あなたは語學の稽古を勵め。もしあなたが自分で讀みたいと思ふ二三の佛蘭西書を自由に讀み得るやうになつたら、それほどあなたの孤獨を慰める者はなからう』

とモレル君のお母さんの許から手紙の中に書いてよこして呉れた。そんな手紙を寄せて旅の私を勵まして呉れるのもあの老婦人だつた。

時には、私は下宿を出てそこいらの町まで買ひ物に行つて見ると、マロニエの並木の下あたりでいろいろな人に行き逢つた。煙草好きな私は、どうかすると屋外でも一服やりたくなつて、紙巻煙草の吸殻を町の片隅に捨てることもある。それを私の見て居る前で拾ひ取つて行くやうな男にも逢つた。

その往來の人の見て居る中で、恥も外聞も忘れたやうに石造の歩道に腰を曲めて、落ちた巻煙草の吸殻を拾はうとする男が、物乞ひするほどの人とは私の眼には見えなかつた。

『われ／＼の國の方の都會には、これほどの貧乏はない。』
と私は自分に言つて見た。

三十二

マルセエユの港で別れて來た人達にはあれぎり私は誰にも逢はなかつたが、唯一度、巴里の方で思ひがけない人に逢つた。あの佛領セエゴンの港にある殖民地の劇場を打ちあけて私達の船に乗込んで來た劇團の一行は可成の人数であつたが、その中に年の若い喜劇役者も加はつて居た。あの喜劇役者に私とはセエゴン以來ずつとマルセエユまで同じ船室に寢泊りして居た。同室の船客が必ずしもさう

皆が皆懇意になるとは限らなかつたが、船が地中海の入口にさしかゝる頃、一日高い波に遭遇した時に、私はあの船に弱い旅役者を介抱して来たこともある。その喜劇役者に、しかも思ひがけない場處で逢つた。丁度私が巴里のオツシユの通りにある大使館を訪ねた歸り路で、東京なら麴町邊とも言ひたい静かな並木の續いた道を電車の乗り場まで歩いて行くと、横合の小路の方から辻馬車を驅つて来た年の若い佛蘭西人があつた。見ると、あの役者だ。車上に相乗して居た若い女は、これもエルネスト・シモンの甲板で見知り越しの女優だ。先方でも私を見ると、思ひがけないところで再會したといふ顔付で急に車の上に立ち上りながら馬丁に聲を掛けて、車を停めさせた。二人は車から駆け降りるやうにして私の方へやつて来た。男も女も私に握手を求めた。その時は私もいくらか二人の話しかけることを聞取れたので先方ではそれをめづらしさうに言つて、住所のついた名刺などを取出して私に呉れた。殖民地の方でこそ巴里の役者だが、男も女も航海中に見たと同じやうな、派手な職業の人達にも似合はない程見すほらしい風俗をして居た。

「今にもう君も巴里人だ。」

そんな喜劇役者が言ひそふな言葉を残して置いて、やがて復セエゴン以來の馴染らしい女優と一緒に車に乗つて行つた。

それぎり私はあの役者にも逢はない。しかし思ひがけない人に途中で遭遇した爲に、何となく私の旅して行く途が餘分に遠くなつたやうな思ひをさせられた。

私は着る洋服も假、住む室も假、眠る寢臺も假で、人と話しする言葉迄も齒齋いほどの假のものだつた。その私は自分の部屋に居て、天井の上の方から傳つて来る幽な洋琴の音を聞いた。秋が深くなつても私の旅窓へは蜻蛉一つ飛んで来なかつた。私はいくらかでも部屋を住みよくしたいと思つて、それにはなるべく室内を簡素にしやうとした。黒い滑かな石で意匠してある暖爐の上には、何處かの古道具屋からでも掘出して来たやうな鑄物や焼物の類がごちや／＼と置並べてあつた。さういふ煩はしい飾りの器物は下宿の主婦の方へ返してしまつた。壁の四隅には希臘あたりの女神といふも名ばかりの裸體の女の姿が古い銅版畫の額になつて三つも四つも掛つて居た。それも返してしまつた。『ソクラテスの死』と題した大きな銅版畫の額だけを壁の上に残して置いた。山本君が来て私の部屋を見た

時に『あの額とあなたとはなんの関係があるんですか、』と畫家らしいことを言つて笑つたのも、その面白くも可笑しくもないやうな銅版畫だ。

斯うした假の部屋で、私の心を慰さめたのは窓から見えるブラタアヌの並木の一つであつた。私は寢臺の上に腰掛けながらでもその枝を見る事が出来、窓の近くに行けば可成りな大木の幹から梢までの全景を見ることが出来た。窓はそれを朝夕の友とした。遠く離れて居る國の方の友達の誰の顔を見ることも叶はず、誰の聲を聞くことも叶はないと思ふやうな折には、私はそのブラタアヌの木を見に行つた。その木は私が待受けると同じやうにして、私の許へよく話し込みに来る山本君等を待受けるといつてもいゝくらゐであつた。

三十三

國から來て巴里に集つて居る美術家仲間にはいろ／＼な人があつた。その中でも私は山本君が一番早く知つた。いつでも山本君が私のところへ訪ねて來て呉れるのはシモネエや下女の取次を待つまでもなく、下宿の廊下づたひに私の部屋まで響けて來る鈴の鳴らし方で、直にそれが山本君だと分つた。ある日も又その鈴が鳴るのを聞いた。私は眠り難い夜を送つた後の旅らしく淋しい心持で山本君を自分の部屋に迎へた。どうかすると一晩中まんじりともしないやうなことが私に起つて來た。

私の下宿もひつそりとして居る時だつた。南獨逸の方から一夏を巴里に送り來た澤木君も最早隣室には居なかつたし、此の下宿に落合つた郡君も食堂の隣の室に居なかつた。澤木君は慶應の留學生として美術史專攻の立場から、郡君は若い詩人としての立場から、建築や繪畫や音樂に關した話を私のところに残して置いて、一人づゝミュンヘンの方へ向けて發つて行つた。山本君でも見ると、よく澤木君や郡君の噂が出た。私が山本君にすゝめる部屋の肘掛椅子も、澤木君が小田原の方の黄色い密柑の思出話なぞを残して置いて行つた其同じ椅子だ。

山本君がシテイ・ファルギエールの畫室の方から見つけて持つて來て呉れた古い湯沸とアルコホル洋

燈とで、夏以來私の部屋でも茶を入れることが出来るやうに成つた。私の贅澤はこの巴里に居てふるさと懐かしい緑茶の香りでも嗅いで見るくらゐのものであつた。その日も私は山本君への馳走振に自分の好きな茶でも煮て出さうとしたら、

『どうです、屋外へ出ませんか。桑重も今、シモンヌの家の方に来て居ます。』

この山本君の話で、君は私を誘ひに来て呉れたことが分つた。桑重君は亞米利加の方から巴里へ移つて來た畫家で、旅の空で私の識合になつた藝術家仲間の一人だ。山本君のいふ『シモンヌの家』とは、つい私の下宿からも近くて美術家仲間のよく集まる小さな珈琲店だ。

『山本君ゆふべは僕も殆ど眠らなかつた。』

思はづ私はそんなことを言出して山本君と二人して部屋の窓に近く立つた。

『よくあなたには眠られないといふことが有りますねえ。』

と山本君は私の顔を見まもるやうにして言つた。さう言ふ山本君は私より先に國を出た人で、可成まう旅に揉まれて來た君の様子が何となく私の身にしみた。

『國の方に居ると同じ氣分では暮らせないものだらうか。』

と私が言つて見たら、山本君は山本君で巴里に來て居る美術家仲間のことを思ひ出したやうに、

『なにしろ、小杉君が巴里に着いた時などは、三日も寢臺の上に坐つて腕組みしてしまひましたからねえ——あの小杉がですよ。』

三十四

やがて私は山本君と連立つて下宿を出た。町には婆さんが燒栗の店などを出して居る頃で、最早屋外を歩くには厚い外套が欲しかつた。

『信州を思出すね。』

と私は山本君に言つた。山本君は私と同じ信州生れで、私に取つても縁故の深い小縣地方の人であつ

た。

『澤木や郡も奈何して居るか。』

と山本君も南獨逸の方に居る二人の噂をしながら歩いて行つた。澤木君は蒲柳の質といふ古い言葉をそのまゝ當嵌めてもいゝやうな人で、澤木君自身にもそんなことを言つて居たかと思ふ。澤木君の學校の人達が歐羅巴への留學生として見送る時にも君の健康を案じたとかで、萬事に綿密な君は醫師の診察を受けた上で國を出て来たといふ話もあつた。一夏一緒に暮して見るうちに、巴里の空氣は澤木君に適しないのかと思つて、夫を私は心配したこともあつた。郡君はまた郡君で旅の身に熱のあることを感ずると言つて、さういふ不安を強い酒に紛らはさうとしたことを私は覚えて居る。私は國から藥を入れて持つて来た袋などを取出して、ある藥を郡君に勧めた時に、そんなものまで用意して来たのか、年を取つた人は違ふと言つて、郡君から笑はれたことも有つた。旅にある澤木君や郡君がよく私達の噂に上るのは、一つは左様いふことが氣に掛つたからで。でもあの二人は元氣だつた澤木君等が若々しい眼をきゃやかしながら互に競ひ合ふやうにしてよく往つたり來つたりしたボオル・ロワイ

アルの通りは、丁度山本君と私とがあゝの二人の噂をして歩いて行くその道だ。

『自分等の國の方にあるやうな繊細い味ものは、こゝには少い。でも斯の大味なものが解らなければ歐羅巴を旅した甲斐は無いと思ふ。』

あの澤木君の言葉も私には忘れ難い。

天文臺の前あたりからゴブランの織物工場の方までも續いて居るボオル・ロワイアルの通りには相應に人の往來があつた。その中に混つて歩いて居る私達の位置も可成り不思議なものではあつた。旅となれば私達は何事も許されて居た。夫にしても私達は自分等の生活を簡素にしたのか、斯の大都會の中に落魄れて居るのか、その差別すらもつけかねるやうに思はれた。斯うした不思議な心持で、私は山本君と一緒にボオル・ロワイアルの通りから青物市場の小屋について横町を曲つた。其狭い歩道に添ふてヴァル・ド・グラスの陸軍病院の建築物の見えるところへ出た。

いくらか勾配のある細い裏町をサン・ミッシェルの表通りの方へ上つて行くと、町の角のところ例の『シモンヌの家』があつた。

山本君と私とがその珈琲店に入ると、帳場の横手には珈琲皿を洗ひながら私達に挨拶する愛想の好い肥つたおかみさんが居た。地下室の物置の方からは葡萄酒の壘を抱えて店へ昇つて来るがつしりとした體格の亭主が居た。そこは用達の序に立寄る客のために珈琲も温めれば、仕事の暇を見つけては休みに来る労働者達の爲に酒も注いで出すやうな家であつた。帳場の前に立つてコップ片手に話し込んで居るやうな近所の人達が絶えなかつた。ルキキサンブルの公園の樹木も帳場の前から見えて小さな珈琲店に適はしい位置にもあつた。その店の奥の部屋に桑重君が私達を待つて居た。私は國を出る時にも佛蘭西船を擇んで乗つて來たくらんで、旅の仕方もいくらか他の人達とは違つて居たし、巴里に來た當座は大寺君以外の同胞の在留者も知らなかつた。私は寧ろ佛蘭西人を知らう

三十五

知らうとのみ懸けて居た。この私は、巴里に居る日本人には附合はないものゝやうに思はて、その爲めに私の仲間はづれを憤つた人もあつたとやら。その事を私は後になつて山本君から聞いて知つた。私のつもりではわざわざ歐羅巴の旅に來て日本人同志がさう一つところに集まつて了つても仕方ない。その意見だつた。しかし私は何時の間にかさういふ孤立を捨てるやうに成つた。私は既に桑重君の住む畫室代りの部屋の方へも度々足を運ぶやうに成つたし、時には君が手料理の勦焼に招かれて行くこともあつたが、その度に山本君が手傳ひに行つて居た。桑重君が一方で日本飯を焚けば、山本君は一方で牛肉を煮る支度をした。それを見る度に私は深く心を引かれた。美術家仲間のよく集まるその『シモンヌの家』に私が足繁く通ふやうに成つたのも、矢張その頃からであつたと思ふ。白い布巾を小脇にはさんだ男の給仕が私達に續いて奥の部屋に入つて來た。給仕は寒水石の卓の上を布巾で拭いて何を註文するかを私達に尋ねた。

『アン、ボック。』

と桑重君は何處かに亞米利加の美術學校時代をしのばせるやうな特色のある音の調子で言つた。

私達は三人とも註文するものが違つて居た。桑重君は大きなコップになみ／＼と注いだビール、山本君はちびり／＼とやるやうな香の強いコニヤック、私は酒よりも珈琲を註文した。その珈琲店は、亭主も、おかみさんも、時に店の手傳ひに来るおかみさんの妹も、皆田舎出の佛蘭西人らしい働き好きな人達ばかりで、氣が置けなかつた。殊に奥の部屋の方は、稀に相曳する佛蘭西人の男女の客を見かけるぐらゐのもので、私達だけで占領することが出来た。澤木君や郡君が巴里に置いて行つた旅の話はそこにも残つて居た。郡君が桑重君の太い腕を抱き擁えるやうにして、『桑重、僕に君の健康を分けて呉れ』と洋服の上から噛みつく眞似をして戯れたことのあつたのも、その部屋だ。

『健康を呉れ。健康を呉れ。』

あの郡君の聲はまだ私の耳について居た。その部屋の片隅では亭主から給仕まで一緒に食事する家庭的な圖の見られることもあり、秋のサロンの噂でも出るとそこに集まる美術家同志の間には時ならぬ議論の花のさくこともあつた。『リラ』のやうな珈琲店とは違つて、そこは隠れた場所であつた。

三六

十五六ばかりになる珈琲店の一人娘が兩親の働いて居る店の方から何氣なく奥の部屋へ入つて來た。娘は私達の集まつて居るのを見て山本君や桑重君の側へ挨拶に來るほどの親しみを見せた。山本君等は娘の白いきやしやな手を軽く握つて會釋した。娘は寒水石の卓を廻つて私のところへも握手を求めに來た。この娘がシモンヌだ。最早その部屋には置暖爐の温めてある頃であつた。娘は別にはにかむ容子もなく、暖爐の側から壁に添ふて二階の方へ昇つて行つた。

『シモンヌも今が可愛いさかりだね。』

と私が山本君に話して居るところへ、復た娘は一階つゝ階段を踏む無心な靴の音をさせて階上から降

りて来た。親達こそ揃ひも揃つて佛蘭西の地方から稼ぎに出て来たやうな巖疊造りの人達だが、シモンヌは細腰で、巴里の娘らしい風俗がいかにも好く似合つて見えた。

『シモンヌ』

と呼ぶ母親の聲を聞きつけて、娘は店の方へ急いで行つた。桑重君は自分の妹の噂でもするやうに、

『あれで大きくなつたら、反つていけなく成つてしまふんぢやないか。僕はさう見てるよ。』

『大きくなつて平凡な佛蘭西の女になるか。』と山本君も言つた。『どうして、こつちの女は年をとると彼様肥つてしまふだらう。こゝのおかみさんも随分面白い顔付をしてるね。あのお母さんがシモンヌのやうな娘を生んだかと思ふと、一寸不思議な氣がするナ。』

『あれで娘は、どつちかと言へばお父さん似だね。』と私は山本君に言つて見た。『何にしても今が可愛いさかりだ。』

桑重君はビールのコップを前に置きながら、

『一體、こゝの家は僕が最初に見つけた家です。今ぢや山本の方にお株を取られてしまつた——』

と私に言つて見た。この桑重君は私達三人の中では一番長い外國生活の經驗を持つて居たが、年齢を聞くと山本君よりも若かつた。その時、表の店の方から二人の美術家仲間が連立つて入つて来た。一人はダンフェール・ロシユルウの町に畫室住居する柚木君、一人はモン・バルナツスの方に住む金山君だ。續いて同じ美術家仲間の藤田君も入つて来た。藤田君は山本君と同じシテイ・フアルギエールの方面に住んで居た。

柚木君は屋外から入つて来たばかりのやうに耳を紅くして、置暖爐の側に立ちながら、

『金山と二人で今日はベルンハイムまで畫を見に行つて来た。藤田とは歸りに一緒になつた。こゝの家の前を通つたら君等が居ると言ふもんだからね、一寸寄つて見たよ。』

斯う言ふ人の若々しい聲や、同じ若々しい中にも何處か錆のある金山君の聲や、賑やかな藤田君の笑い聲やで、私達の居る部屋にはかに活氣を添へた。斯うして落合つて見ると、藤田君は小山内君の親戚にあたる人であり、金山君は美術學校の留學生の格で来て居るといふ人であり、柚木君は満谷君に就いて繪畫を學んだといふ人であつた。聞いて見ると満谷君も巴里に畫室住居して居るとやら。

先生とお弟子さんが同じやうに美術の巡禮者として来て居ると聞くのも旅らしかった。誰を見ても旅に揉まれて居ない様子の人はそこに見えなかつた。旅行家の中の旅行家とも言ひたい金山君の日に焼けた顔、美術家仲間でも一機軸を出して居る藤田君のスタイル、何もかも私の身にしみた。

三十七

窓の外を通る野菜賣の女の呼聲と、往來の人の靴音と、時々店の方から起る客や亭主の笑ひ聲と、それらの外に私達の耳につくものは無かつた。さうした場所に集まつて見ると、些細な事に慰められるのは私一人でも無いことが思はれた。若い美術家仲間は一杯の珈琲やビールなどに旅の憂さを忘れて居た。

藤田君は厚い毛糸で織つた寛濶な上衣の胸のあたりに襟飾を結んで、皆の中に腰掛けて居た。耳のあたりまで垂れ下げた美術家らしい黒い髪も私の眼についた。風俗正しい巴里で破格なのは美術家だ。がその中でも藤田君のは窮屈な様式を捨て、居る方だつた。この藤田君には友でもあり師でもある川島君といふ美術家があつて、あらゆる意味での近代といふものを排するやうな藝術的な試みは川島君から傳へられて居た。この二人の若い美術家に取つては、種々な方法の生活の試みは單なる好奇心や一時の出来心からではなく、希臘の昔に復らうといふところから来て居た。希臘人のやうな肉體を持ち、希臘人の様な生活を送つて見やう、すくなくも川島君等の夢みるものはそこまで歐羅巴の源に溯らうとするところにあるらしかつた。この試みは、時には奇異に、時には突飛に見えた。でも藤田君は平氣でそれを續けやうとして居た。最初の中こそ私も『巴里にはいろいろな美術家が居る』と思つたことも有つたが、それで押通さうとする藤田君の忍耐を笑へなくなつた。それに、すこし見慣れたら、破格な服装もさほどに思はれなかつた。

『こないだは面白いことが有つたよ。』とその藤田君が言出した。

『川島と僕とでサン・ミッシェルの通りを歩いて居た。二人ばかり佛蘭西人がやつて来て、川島に突

ツ掛つた。すこし酔つて居たんだね。『何故、君等はそんな變つた風をして居るんだ』と言ふんサ。そのうちに向ふでは二人掛りで喧嘩腰に來た。川島が危ないと思つたから、僕はその二人を柔道の手で投げたよ。あゝ、パンテオンのカフェの前あたりでサ。皆見て居たあね。』

藤田君は旅の挿話の一つを語るやうにその話をした。

『や、今日は大入だね。』
と言つて、そこへ入つて來た美術家があつた。その元氣の好い、理窟ばなれのした人は長谷川君だ。私が東京の高安君から饒別に貰つて來た『十便十宜畫帖』をめづらしがつて、小杉君と二人で私の下宿の方に見に來たことがあるのも、その長谷川君だ。

『オイ山本、奈何だい。』

と長谷川君は山本君の側へ行つて肩を叩いた。

『多分この邊だらうと思つて、見當をつけて來た。果して居た。』

と復た長谷川君は言つて、力のある快活な聲で笑つた。この長谷川君などはそこに集まつた畫家の

中でもふけて見える方だつたが、年齢を聞くと驚くほど若かつた。

『斯うして集まつて見ると、みんな顔色が悪いなあ。』

と言ひながら、桑重君は兩隣や差向ひに腰掛けて居るもの、旅らしい顔を見廻した。

三十八

『さういふ桑重だつて、あまり顔色の好い方でもなからう。』と山本君が笑ひ出した。

『いや、僕などは君、』と桑重君は言つて、すこし調子を變へて、

『さういふ意味で言つたんぢやないサ。』

『それはよく解つてるよ。』と長谷川君は笑ひながら混ぜかへした。

『どうもみんなの顔色が好くないぞ。』と復桑重君が言つた。

「こつちの人間との比較から来るんぢやないか。」と金山君は言った。

「それがね、」と桑重君は引取つて、

「みんな同じやうに好くないなら比較から来るとも言へるが、長くこつちに居るものほど顔色が悪いからサ。これで國へ歸つて日本の方に居る外國人を見給へ。きつとこちの人間よりは顔色が悪いから。」さう桑重君に言はれて、私も若い美術家達の顔を見比べた。それほどの風土化が皆に起つて来て居るとは、私も氣がつかずに居た。

「全くだねえ。鏡を見るのもいやに成つちまうことがあるよ。」と金山君が言った。

「そんなに皆顔色が悪いだらうか」と私は山本君に言つて見た。

「紅味がなくなつて来るのは不思議ですね。」と山本君は答へた。

「心細いことを言ひ出すなあ。」

と長谷川君は笑つて、話頭を變へやうとするやうに給仕を呼んだ。そこに集まつた丈の連中でも、美術家として歩いて行く道は一人々々違つて居たらう。その氣質を異にした人達が互に勵ましたり勵

まされたりして居た。

やがて私達はしばらく時を送つた後で、一緒にその『シモンヌの家』を出た。長谷川、袖木の二君は天文臺の方へ、山本、桑重、金山、藤田の四君はモン・バルナツスの停車場の方へ、それ／＼歸つて行かうとする人達の中に混つて私もそこまで話しく／＼歩いた。その邊はルエキサンブルの公園の入口から天文臺前まで續いて居る廣場で、落葉したマロニエの並木の黒い幹や枝が秋の深さを語つて居た。

「どうです、マロニエは好い木でせう。葉が落ちてしまつた後も面白味がありますなあ。」

と桑重君は向ふの石の町に立つ一群の枯木を私に指して見せた。町角にある『リラ』の珈琲店の暖簾も、ネイ將軍の銅像も、枯木の間を通してよく望まれるやうに成つた。その邊を小さな油繪に取入れ、黒い額縁にはめたのが桑重君の畫室に掛つて居たことを私は覺えて居る。

急に山本君は『リラ』の珈琲店の前あたりに立つ人を見つけて、其の方へ走つて行つた。そこにも立話して居る二三の美術家仲間があつた。私は桑重君と一緒にそこ迄歩いて行つて見て、何氣なく言出し

たやうな山本君の口から佛蘭西の年老いた畫家の噂を聞いた。その噂は近く巴里を去つた美術家仲間の一人に繋がつた事でもあつた。

「和田がドガに逢ひたいと言つて、人を通してその事を傳へて貰つたさうだ。その時のドガの答へを僕も聞いたがね。自分は人類學の研究をしては居ない、とサ。さう言つてドガが斷つたさうだ。」
この山本君の又聞きにした話を聞いて、笑ひ得るものはそこに一人もなかつた。でも私達は互に顔を見合て、子供が嘖飯すやうに笑つて別れた。

三十九

石像や銅像の多い事は驚くばかりな巴里の町に住んで見ると、ロダンのやうな彫刻家がこの土地に生れたのも偶然でない事を知る。私はこの石像や銅像に代るべきものを自分等の國の方に求めて見た。

そして石碑といふものが自分等の國の方の路傍にも見られることに想ひ到つた。多くの文字を石の面に刻んで事蹟を後世に傳へやうとする石碑のかはりに、こゝには石や銅で象つた人體の記念が置いてある。あの東洋風な石碑が自分等の國の方の橋の畔にも見られるやうに、こゝには二人の藥劑師の立像なぞまで私の下宿から遠くないサン・ミッシェルの町角に建てある。その臺石には、この二人の藥劑師はキニイネのやうな解熱劑を發見して人類のために貢献した人達だといふ意味のことが、學校通ひの子供の眼にもつくやうなところに刻んである。

暇ある毎に私はこの町の界限を靜かに見て廻るのを樂しみにした。私は所謂羅典區の中心ともいふべきソルボンヌの丘の方へも行き、國防記念の巨大な獅子の銅像の見えるダンフェール・ロシユルウの廣場の方へも行き、ボオドレエルやマウバツサンが永眠の地なるモン・バルナツスの墓地の方へも行った。私の足はよく貧しい町々の方へも向いて、ゴブランの織物工場の附近から、あの野菜や魚の市の立つごちやくとした町の界限をも見て廻つた。時には私は天文臺の裏手を廻つて、人通りの少い並木街の方へも行つた。並通の住宅とも見えない建築物が續いて居るのは工場の多い町でもあるの

か、さう思つて歩き廻るうちに、思ひもかけないやうな佛蘭西語の樂書を男だけの立寄る場處に見つけることも有つた。そこには未開の人民を笑へないやうな惡戯が隠れた壁の上にはあらはれて居た。

「野良犬のやうに巴里の町を馳け廻り廻つても仕方ない。」

あの小杉君の言草ではないが、どうかすると私は町を歩き廻つて居るうちに、靜かに見て廻るのを嫌しんで居るのか、歩き廻らずには居られなくて歩いて居るのか、その差別すらつけかねるやうに思ふこともあつた。

ある日、私はシテイ、ファルギエールの畫室の方に山本君を訪ねるつもりで、自分の下宿を出た。産科病院前から續いた並木街をヴヴンの辻へと取り、あれから細い横町についてヂーシラルの通りへ出た。野菜から鳥、魚、腸結の類までの市の立つところで、私の下宿の主婦はそこまで自分で買出しに来る事もあるといふ話だつた。巴里の町々の停車場には種々な名高い人の名に因んだものがつけてあるが、私の歩いて行く道筋にもエトガア・キネは歴史家の名に因んであり、バスツウルは細菌學者の名に因んである。歩いて見ると、私の下宿する町からバスツウルまでは可成あつた。其邊まで行くと可成場末の方

に近い感じもした。シテイ・ファルギエールの古い別荘跡はある横町を折れ曲つて行つたところにあつて、門前の居酒屋風な家の前に立つ男の顔からが何となく暢氣さうに見えた。幾つかの畫室は母屋と相對して、呼べば答へさうな位置にわかれ／＼に置いてある。入り組んだ母屋の建築物に續いた横手の方には何をする人達が住むかと思はれるやうな怪しい窓々があつた。其別荘跡の一隅へ石段を上つて行つたところに山本君の名刺が出て居た。

四十

山本君がその畫室に移つたのは近くのこと、一度訪ねて来て呉れとの話もあつたので、私も君を畫室に見たく思ひながら青黒い色に塗つてある扉を叩いて見た時、内から扉を開ける鍵の音をさせて、山本君が顔を見せた。

『よく来て下さいました。モデル女が邪魔しに来てうるさいものですから、斯うして鍵を掛けて置いたんです。』

と山本君は私に言つて見せた。

まだ室内は火なしにも暮らせたが、山本君は畫室の隅の方から畫布を張るための白木の椽を探して来た。それを私の見て居る前でへし折つて、焚付がはりに置暖爐の中へ投入された。

『まだ、君、火も要らないぢやないか。』と私が言つたら、

『でも、何だか火が無いと寂しい。』と山本君は答へて、そこへ持つて来た製作用の木の椽を惜し氣もなく折りながら、『折角被入しつて下さつたんですから、火でも焚きませうや。』

畫架やら机やら寢臺やらが置いてある天井の高い仕事部屋の内には楽しい火の燃える音がして来た。桑重君の畫室を見るとは違つて、そこには素描一つ眼に置くやうな場所に出して置いてなかつた。油畫の風景一枚だけが一方の壁の上に留針で留めてあつた。私は山本君が畫室に腕組して送る日の多いことや、其心の戦に山本君が自分で苦い『懶惰』といふ名をつけて居ることを知るやうになつた。

私は暖爐の側へ椅子を寄せ、火に映る山本君の顔を眺めて、君の旅も骨が折れると思つた。

その時、畫室の外へ来て扉を叩く人があつた。それを山本君が聞きつけて扉の方へ行つたかと思ふと、貧しい感じのする土地の娘が開いた扉の間から半身ばかりを現はした。帽子も冠らずに居るその娘は中の様子を見て、軽く點頭いて直に復立去つた。

『モデルですか。』と私は訊いて見た。

『え、この邊は美術家の巢ですから、彼様して使つて呉れないかつて、よく來ますよ。モデルもいが、少し顔を覚えやうものなら平素遊びにやつて来て騒いで仕方がありません。』

斯う山本君は言つて、やがてその部屋から門前の方までビールなどを買いに行つて来て呉れた。

『どうです、その畫は。』と山本君は壁の上にある自作の風景を私に指して見せながら、『それはブルタアニユの田舎の方へ行つた土産です。その畫だけは自分でもいくらか氣に入つて居ます。佛蘭西へ來てからといふものは、自分の持つてる舊い嫌なものは滅茶々に壊れてしまひました。』

四十一

高いところから光線を導くやうになつた畫室らしい窓の下には、彫刻の器具なども置並べてあつた。山本君はその窓に近く机を引寄せて、自分で描き自分で彫り又自分で手摺にしたといふものを私に取り出して見せた。旅に来て版畫の面白味をも覺えるやうになつた私は山本君と一緒に君が手摺にした小品を眺めた。其中には、船の欄に倚りながら海を見る女の圖などもあつた。新嘉坡あたりの印象と見えて、その女の日本風俗にも君等が日本郵船での旅情を偲ばせるものがあつた。これを國の方へ送つて知人の間に分つといふ約束はありながら、手數ばかり多く掛つて、兎角思ふことは果せないで居るとの話もあつた。それに、佛蘭西近代の諸大家が與へる藝術上の刺激はそうした版畫の製作に耽るほど君の心を安くしては置かなかつたと思ふ。

暖爐の火は楽しく燃えて居た。山本君はビールを机の上に置いて、それを私に勧め、自分でも旅らしくやりながら、一緒に信濃の山の上の方の噂をした。

『僕のお父さんの所からもね、こないだ便りがありましたよ。巴里であなたにお目に掛つたつて僕が書いてやりましたから、お父さんも大變悦んでよかったですよ。』

酒でも前に置くと、餘分に山本君を遠い烏帽子が嶽の裾の地方に住む年老いた親達を思ひ出すといふ風で、更に言葉を繼いで、

『親といふものにかけては、僕は何のくらの幸福に感じて居るか知れません。両親ともよく氣が揃つて居ます。それは僕を力にして居て呉れます。』

斯ういふ話が出た。

『こないだの晩は乞食モデルが三三人で僕の部屋へ押掛けて來ました。勝手にそこいらにある物を探して、酒を奢らないかなんて言ひ出しやがつて、きたないモデルですよ。でも、酒を飲ましてやりましたら、皆で唄などを歌つて聞かせましたつけ。それを聞いて居たら、終ひには可哀さうに成つちま

ひました——」

山本君はそんなことをも言ひ出して、部屋の内を見廻しながら笑つた。君等が寫生旅行からでも歸つて来て、部屋に火一つなかつたら、斯うした畫室住居も随分淋しいものだらうとも思はれた。

その日は私は山本君を見るといふだけに満足して、あまり長くも邪魔をしなかつた。山本君は私を送りながら畫室を出て、母屋の二階の方に見える部屋の窓を指して見せた。そこに藤田君が住んで居た。山本君は又門の際に見える二軒建の畫室の扉を指して見せた。そこには満谷君が住んで居た。

四十二

小杉君が歸國の日も近づいた頃、私は地下電車でエトワアルの廣場まで行つて、凱旋門の附近に集る五人の美術家と一緒に成つた。それは巴里の郊外にあるペルラン氏の住宅にセザンヌの遺畫を見る

ためであつた。

五人の美術家とは小杉君の外に、満谷君、小林君、山本君、桑重君であつた。その中でも満谷君と小林君とは初めて逢ふ人達で、凱旋記念の巨大な石門の下で互に旅らしい顔を見合はせた。満谷君は袖野君の師であり、小林君は東京の美術学校の助教だ。そこへ集まる前に私達は領事館へ署名に行つて来る程の手数を要した。その領事館の紹介でペルラン氏の方から通知の手紙を受け取るなど、私人の愛蔵するものを見に行くといふことも容易でない。しかし、これは無理もなかつた。ペルラン氏の家では日常使用居間から食堂まで開放して、日を定めて所蔵のコレクションを人に示すといふのであつたから。

私達は連立つて二臺の辻馬車で出掛けた。凱旋門からブウロウニユの森の方へ續いて居る広い道路を乗つて行つた。もしその邊をよく見て歩いたら、巴里の市街がまだ是程に改正されない以前からあるやうな古く残つた木立をその路傍に見つけることも出来たらう。丁度あの東京の市街に残つた古い銀杏の樹などが武蔵野の昔を忍ばせるやうに、その邊の道路に残つた古木にもブウロウニユの森に連

續した昔の巴里を偲ぶことも出来たらう。私達はヌイイーの城門について巴里の外廓を圍繞く要塞の外に出た。ベルラン氏の住むマドリッドの町まで乗つて行く間に、私達の車の上では、時々楽しい笑ひ聲が起つた。

先代のベルラン氏が蒐集したといふセザンヌの遺畫には殆どあの畫家の全景が見渡される。私達は案内する家の人に導れて先づ初期の作品から見て廻つた。どの部屋に行つて見ても額といふ額でセザンヌの筆でないものは無かつた。案内する人は静物の額のみで飾られた食堂の扉を私達に開けて見せた。その静かな部屋に入つて、食卓の周圍を廻つて見た時は、あの畫家が内的生活の自叙傳でも讀む思ひをした。佛蘭西に来て後期印象派の諸家が作品に接してから或は畫風の一變するに至るであらうと美術家仲間に噂されてゐる満谷君をはじめ、小杉君でも、山本君でも、皆その部屋へ行つたら黙つてしまつた。そこは家族の人達が晝に晩に食事するところと見え、食器を容れる戸棚から皿の類までが置いてあつた。窓側の壁に掛かる青い林檎の畫などを見た眼を窓の外に移すと、小春らしい静かな日が青み残つた庭草の上に映つて居た。

私達は更にいろいろな額の掛つた壁に添ふて二階に通ふ階段を昇つた。その壁の横手のところには、『セザンヌ夫人の肖像』が掛つて居た。藍がかつた灰色の畫で僅に夫人の頬のあたりに林檎のやうな紅味を見せて居た。セザンヌが作品の中でも、私はその夫人の肖像の畫を最も好ましいものの一つに思つた。

二階へ上ると、そこにはまたあの畫家が晩年の大作なる『浴女の群』に達するまでの後期の作品が多くあつてあつた。身動きの成らないやうに思ひつめたセザンヌの嚴肅さが次第にある變化を求めて行つた心の跡が部屋々に辿られる。それらの晩年の作品には一つとして畫家が内的生活の變遷を語らないものは無かつた。動かない生物や動かない人物を好んで描いた畫家の色彩までが變り展けて行つて居た。そこには新しいシムフォニーの世界があつた。深い舞踏の世界があつた。畫中の草も木も人も躍つて居た。そして、それらの作品がベルラン氏の居間らしい部屋にも、寢室の壁の上にも掛つて居た。おそらくその家の主人は寢臺の上に横になりながらもセザンヌを見ることが出来たであらう。

『いかに言つても、セザンヌは狭いなあ、』

と山本君は其二階を降りてから、ほつと息を吐くやうにして言つた。禮を述べてその家を辭し去る前に私は邸内の庭のさまざまも見せて貰つた。別荘風な建物の二階の窓のところには、家族らしい人達が顔を出して、めづらしさうに私達を見送つて居た。

四十三

その年の佛蘭西の曆には九月の二十三日を秋のはじめとしてあり、十二月の二十二日から冬に入るとしてあつた。その曆の面から言へば、小杉君のために送別會の催しのはまだく、秋の最中と言つてもいゝ頃ではあつたが、町町の並木の葉は早すつかり落ちてしまつた。空は暗く、日も短かつた。こゝでは黄昏時が長くも思はれるし、また早くやつて来るやうにも思はれた。午後の四時頃に

は町では燈火の點く窓もあつた。實際の感じはもう初冬に近かつた。小杉君を送る美術家仲間の會は、私を迎へる意味をも兼ねて、巴里に一軒しかない日本飯屋の方で開きたいとは、かねて山本君からその話があつた。斯うした場合には山本君や桑重君は先に立つてよく世話をした。その日は巴里に在留する美術家仲間の殆ど全部が集まるといふので、私も未知の同胞に逢ふのを樂みにして日の暮れる頃に出掛けた。古いトリニティの寺院を心あてにして日本飯屋のある町まで行つた時は、赤味が、つた薄い紫色に煙るやうな黄昏時の空の色が続いて居た。日本飯屋では椅子一つ置かずに毛布を敷きつめて、一同胡坐でやることにしてあつた。日頃穿きなれない重い靴を穿きづめに穿いて石の町を歩いて居たやうな私も、そこへ行つてめづらしく靴の紐を解いた。

『よくそんなに支度が出来ましたね』と私は山本君や桑重君に言つたがそこには福引の用意までがしてあつた。山本君等は日本飯屋のおかみさんに鎧までつけさせて私達を待つて居て呉れた。旅の無聊に苦しむ人達は、一夜を楽しく送るといふことのために、あちこちと奔走したり、部屋を片付けたり、諸方の畫室から道具を集めたりして、その骨折を惜まなかつた。

柚木君はダンフェール・ロシユルウの方面から、藤田君はシテイ・フアルギエールの方面から、長谷川君はルウ・ベゾンの方面から、思ひ／＼に集まつて来た。金山君は相變らずにこ／＼した顔を見た。噂はよく聞いて居てもめつたに『シモンヌの家』などへ顔を出したことの無い彫刻家の藤川君、畫室の方へ引籠つてセザンヌの追求に餘念もないといふ安井君、其他私が初めて逢ふやうな美術仲間も、いづれもその日の會合を楽しみ顔に集まつて来た。私はその美術仲間でも一番故參な稻垣君といふ人にも逢つた。稻垣君はロダンのアトリエで彫刻の手傳ひをして居る人で、國を出てからも七八年にも成るといふ。聞いて見ると、そこへ出席するやうな羅典區方面の人ではなかつたが、巴里には二十年も國の方へ歸らないといふ人も居た。

その日は満谷君は見えなかつたが、ベルラン氏の宅住へお供をした日から私も既に識合な小林君がセエヌ河岸にある畫室の方から見えた。

『小林さんが来なくちや、この會は始められない。』

それを山本君にも金山君にも藤田君にも言はれるほど、小林君は若い美術仲間から待たれて居た。

四十四

『旅の健康を祝しますか。』

と山本君はその晩の幹事らしくビールの罎を私の前に持つて来て勸めて呉れた。私の右隣にはやがて歸國の途に上らうとする小杉君が居て、言葉少く酒の香氣を嗅いで居た。

『小杉も今夜は飲んで呉れよ。』

と言ふ山本君の顔はそろ／＼好い色になつて来た。私もその晩のやうに心地好ささうな山本君を見たことは無かつた。

『さあ、歌へ。』

誰いふとなく、その聲が起つた。幹事諸君の心配とそこのおかみさんとの丹精で、旅する私達はま

がりなりにも日本風の料理にありついた。私達は誰に遠慮もなく互ひに胡坐にやつた。おまけに酒があつた。日頃求めても求めてもほんとうの休息が得られなくて、それを制へに制へて居たやうな血氣壯んな美術家仲間、いづれもその『さあ、歌へ』を待構へて居たかのやうであつた。老練な小林君は美術學生時代の昔にでも歸つたやうに、好い聲で歌ひ出した。

その晩は、山口おつがさんといふ美術家をも私達の仲間に加へた。おつがさんは桑重君と同じやうに亞米利加の方から巴里へ移つて來た畫家であつた。背も小造りで、色も白といふ方ではなかつたが、まことにさつぱりとした人で、このおつがさんが巴里に在留する唯一人の婦人の美術家であるといふことも其席を楽しくした。

『藤田も一つ希臘踊を見せて呉れ』

と言出したものが有つた。藤田君の希臘舞踏は矢張君が友人の川島君から傳へられたものと聞いた。

『申談言ふなよ。』と藤田君は戯れに見られることを好まないやうな語氣で答へた。『希臘踊がこんな處で踊れるものか。それより幹事に一任するサ。幹事の命令なら誰だつて言ふことを聞く。僕だつて今

夜は大いに歌ふよ。』

その時、山本君は座の眞中に出て何か持つて居さうな人の名を指した。山本君が長谷川君の名を指した。長谷川君は鎗鏑を歌つた。

『鎗鏑は長谷川のお得意だ。』

と山本君は笑つて、それから柚木君の名を指した。私の左隣に居た柚木君は思ひがけない勸進帳の假色を出した。山本君が金山君の名を指すと、ろくろ酒もやらないやうな金山君の慎み深さうな口から、越後獅子の合の手が流れて來た。

『實に、好い。』

と小林君は一切を忘れたかのやうに聞き惚れて居た。この金山君の口三味線はそこに集まつたものを驚かした。山本君は更に稻垣君の名を指した。國を出てからもう七年にも八年にも成るといふ稻垣君は、さすがにふるさと戀しく思ふかして、我と吾聲に聞入るかのやうに目を瞑りながら、年若い時分からの得意らしいものを一つ歌つた。斯うした美術家仲間が集まつた中で見ると、何と言つても幹

事の山本君は兄さんらしい一人に見えた。私は山本君が静かに歌ふのを初めて聞いた。桑重君はまた幹事の一人らしく部屋を出たり入つたりして皆の酒を取持つて居た。その晩は小林君も心地好さうに酔つた。君は若い美術家仲間の心を引立てるやうに、皆の先に立つて歌つた。この意気さかな先達と調子を合はせる人達の聲は、どうかすると皿を叩く音に混つて、階上階下の佛蘭西人の住居の方まで響けて行つた。一つの合せた聲はより高い他の聲を誘ひ出した。終には皆一緒になつて、まるで無邪気な子供のやうに思ひ切つて騒いだ。

『皆さん、階下のコンシエールジ(家番)が、何ですかやかましく申しますから、十時を打ちましたらお静かになすつて下さい。』

と言ひ入れに來たのは、その日本飯屋のおかみさんであつた。左様いふおかみさんが音もろくに出来ないやうな三味線などを取出して來て酒の興を添へやうとした頃は、それまで續いて來た席の無邪気さもすこし白けた。幹事の用意した福引の中で、佛蘭西の子供の玩具にする小さな喇叭は小杉君に當つた。

『國へ歸つたら、大いに吹くんだね。』
と小杉君は戯れて、その喇叭を自分の口に宛行つて見せた。仲の好い小杉君と山本君とは酒の上で相抱いて、互に遠い別離を惜むやうに見えた。

四十五

到頭私も旅の空で初めてのクリスマスを迎へ、新しい年を迎へた。羅馬舊教國の佛蘭西では新教の國とは祝方も違つて、私が想像して居たやうな『クリスマスの木』などは何處の家にも寺院にも見當らなかつた。ここには義理一編の贈答といふものも極少かつた。暮から餅搗きの音でも聞えて來て、御供や海老や、橙などが飾られ、屠蘇を祝へ難煮を祝へと言はなければ正月が來たやうな氣のしないも

のには、この新年は妙に物足りなかつた。町々の家の入口には緑門一つ飾られたのが私の眼には映らなかつた。國の方の正月を想ひ起させたものはと言へば、私の下宿の裏側にあるタウル（内庭）へ来る寒さうな顔付の藝人であつた。あの藝人ばかりは國の方の門松を立てた家々へ祝ひに来る萬歳のことを思ひ出させた。笛とヴォリンとの一曲の合奏が濟む度に、五層六層の窓々に住む人達は藝人の方へ銅貨を投てやつた。石で敷きつめた内庭の上へ高いところから落ちる銅貨の音は妙に私の心を旅らしくした。私が初めてシモネエの下宿に着いた日に、大寺君が廊下の窓を開けて見せて呉れたのもその窪い内庭だ。大寺君も最早佛蘭西には居なくて、白耳義の旅から英吉利の方へ渡つたと聞いた。私は割合に温暖な日の多い二月を迎へた。かねて巴里の激寒を豫想して居た身には、これは少し意外だつた。そして繰返し々する氣候が復寒さを送つてよこしたかと思ふうちに、毎日毎日掩ひ冠さつたやうな暗い町の空もいくらか明るくなつて行つた。日もいくらか長くなつて行つた。遠い町々の建築物までが春めいた空氣に包まれて何となく靄んだ色を帯びて見えるやうに成つた。よく山本君等の話に出るマロニエの花の咲くといふ頃が待遠しかつた。

時には温暖い音のしない雨が石の町へやつて來た。それが幾日となく降り續いた。さういふ日には殊に旅はさびしかつた。私は八箇月ばかりも眺め暮した自分の部屋の窓へ行つて、兩側に並木の續いたボオル・ロワイアルの町を眺めた。古い寺院にしても見たいやうな産科病院の門の上には、三色旗の雨に濡れたのが望まれる。その門の前あたりにはモン・トオロン行の乗合自動車を待合はせて居る人も見える。私が朝夕の友とするブラタヌの並木もまだ枯々としたまゝで、その黒ずんだ幹や枝の間を通して、車道の片隅に並べてある辻待自動車、六角形の廣告塔とも見まがふ巡査の駐在所などが眼に入る。ゴオルと言つた時代からの佛蘭西の野趣を代表して見せるやうな大きな荷馬車の馬が殿めしい頑固な革製の馬具をつけ、眞鍮の金具を光らせ——あれは私が初めて佛蘭西の土を踏んだ日にマルセユの港町の方で先づ眼に着いたものだが——葡萄酒の樽などを積んだ荷車を引いて、雨に濡れながら並木の横を通つた。向ふに見える高い五層の建築物も私の眼に親しいものと成つた。私はその建築物に四十いくつかの窓を數へる。産科病院と向ひ合つたその町角の珈琲店の佛蘭西風な暖簾までが私には親しみのあるものと成つて來た。

毎日の様に私の部屋の上の方で洋琴を復習ふ音が耳について来た。階上に住む小娘の無心の指先から流れて来るやうな幽かなメロディに耳を澄したり、どうかすると床を歩き廻る娘の靴音を自分の頭の上で聞きつけたりと、私は國の方に居る友達や自分の子供等からも全く離れて居ることを思った。私はあの靜かに腰掛けることも本を読むことも出来る汽船エルネスト・シモンの甲板の上で、猶且船體の動搖が一刻も自分の身に傳はつて来ない時のなかつたことを思ひ出し、それを斯の異郷の客舎に譬へて見た。一日も私は動いて居ない日はなかつた。

私の部屋には東京の有島君からわざわざ巴里宛に贈つてよこして呉た卓上用の瀟洒な布があつて、其藍色の燕子花の模様などを樂みながら、好きな茶の到来したのを入れて徒然を慰めることも出来る。信州小諸の在の土屋君から貰つた千曲川の繪葉書なども暖爐の上に長く置いてあつて、遠くあの山々の方へ旅の思ひを馳せることも出来る。でも、ふるさとの花の模様にも慰められず、好きな茶にもなつかしい繪葉書にも慰められないやうな時には、仕方なしに私は洋服の儘、肱掛椅子の上に昇つて、そこに胡坐をかいて見た。時には洋服を脱ぎ捨て、靴も脱ぎ捨て、部屋着にするつもりで國から持つ

て来た和服の着心地を樂みながら、獨りでちつと寢臺の上に坐つて見た。それでも慰まないことがあつた。私は部屋の床の上に跪き冷い板敷に自分の額を押當てるやうにして、涙を流したいばかりに思ふこともあつた。

四十六

何かにつけて私は國の方のことを思ひ出すやうに成つた。私の下宿から近い天文臺前の廣場のところ
で四方から續いた並木の街路が落合ふ辻の一角には、丁度『リラ』の珈琲店の前あたりに、花を賣る婆
さんの屋臺があつた。語學の教師の家から歸りがけに、私はその婆さんの店から室咲のオイエーを買
つて、それを提げながら戻つて来た。溫暖い雨の中を歩いて旅の外套が濡れたのも嬉しかった。私は獨
りで徒然な時の慰みにするつもりで、買つて来た花を部屋の暖爐の上に置いて見た。『慣れて見れば、

鏡で部屋を飾るのも月並だね、』とは大寺君が残して置いて行つた言葉だが、斯の下宿の部屋毎にあるやうな大きな鏡が私のよく行く暖爐の上あたりにも置いてあつて、買つて来た花はその鏡に映つた。オイエーの花は變り咲の朝顔でいふ牡丹種に似て居る。白いうちに淡紅を帯びたのは殊に可憐な風情がある。椿のやうな甘い香をも持つて居る。

最早カアナルの祭の季節が来て居た。二月二十三日の火曜には種々な假装をして町々を賑はした人達が部屋の窓からも見えた。食堂を出る度に前々から其噂があつて、下宿の主婦の許へは郷里のリモオジユの方から豚の腸結なぞの小包も届いた。あの日は『肉食の火曜』とか言つて、脂肪こい馳走があつた。そのかはり翌日からは土地の人達は物齋精進といふことで、それがミ・カレエムの日まで續くといふ。こゝでいふ精進とは牛や羊の肉を忌むだけで、魚肉はかまはないとしてあつた。さすがに羅馬舊教の國だと思ひながら、私は暖爐の上に置いた花の側から窓の方へ行つて近く立つて見て、七月十四日の共和祭よりも暮のクリスマスよりも佛蘭西での祭らしい祭の氣のする季節が私の旅窓へやつて来たことを思つた。しとしと降る雨を見て居ると、旅する人達のあはれさが私の胸に浮んだ來た。

ふと私は西鶴の物語で讀んだ女の身上話などを思出して、古い浮世草紙の挿畫の記憶までも眼に浮べて見た。あの物語で讀み挿畫で見たやうな雨の中で泣くちひさな子供の姿は、まざく／＼と私の眼前にある。その子供は一人かと思へば幾人とな居る。いづれもちひさな落の葉のやうなものを冠つて、兩手を眼の所に宛行ひながら泣いて居る。其の子供等の冠つて居るものは落の葉ではなくて、朧衣といふものだ。あはれな光景を眼前に喚起したものだと思つて、その記憶を辿つて居ると、雨に濡れた子供の一人は泣く／＼語り出した。

『わたしのお母さんはアルサスの生れのもです。お父さんはこの土地のもので居ながら、お母さんを置去りにして、何處かへ行つてしまつたと言ひます。わたしのお母さんはそれは優しい人ですけれど、まだ年も若くて、わたしが側に居たでは邪魔に成ると言ひますし、それにわたしに食べさせるものも無いと言ふのです。わたしは他の子供のやうに斯の世へ生れて來ることが出來ないので。』

斯う言つて泣いた。さうかと思ふと、今一人のちひさな子供が又同じやうに泣き／＼語り出した。

生れの人です。わたしのお母さんはお父さん思ひで、年の若いお父さんのつまづきに成るやうなことが有つて成らないと言ふのです。お父さんがお國へお歸りになれば、行く／＼は立派な人にお成りなさるに違ひないし、お母さんやわたしがお國の方までお供をしたではお父さんが出世のさまたけに成ると言ふのです。それにお母さんとお父さんが長く一緒に居られる人達でないことは、お母さんもよく知つて居ると言つて、無理にお父さんを引留めやうとはしないのです。お母さんはわたしにおベツも造つて呉れたいし、わたしを可愛がつても呉れたいのだけれど、どうしてもそれではお父さんの爲に成らないと言つて、わたしはお母さんから頼まれるのです。それでわたしは斯の世へ生れて來ることを許されないのです。』

と言つて泣いた。旅なればこそ斯様な子供に眼を留めて見る氣にも成るのだ。とあはれに思はれた。幻のやうな其子供等の聲は耳に聞く寂しい雨の音と混り合つた。

四十七

暖爐の上に置いたオイエーの花も少し萎れた頃に、山本君はシテイ・ファルギエールの方から訪ねて來て、

『この花の感じは少しセンシユアルに過ぎる。』
と言つた。これは奈何にも畫家の評らしく思つた。山本君も畫室にばかり引込んで居られないといふ風に見えた。その頃はもう満谷君も小杉君も疾くに巴里に居なかつたし、桑重君も畫室代りの部屋を疊んで亞米利加の方へ出掛けて行つた後であつた。美術家仲間の會合でもある度に必ず顔を見せた小林君までも近いうちに歸國の途に上らうとして居た。

『國の方で炬燵にでもあたつて居る人は羨ましい。』
思はず私はそんなことを山本君に言つて見せた。

『でも、カアナルがやつて來るやうに成りましたね。』

と山本君も言つて、濃い霧でも襲つて来る時にはどうかすると日中でも燈火を点けたい程の暗い巴里の冬が漸くそれでも峠を越したといふ意味を通はせた。暮の忘年會がルウ・テアトルの方であつて、羅旬區方面の美術家仲間一同が集まつた時に、ふとした酒の上の過失から山本君と私と一緒に火傷をしたことが有つて、山本君も大分弱つたやうだし、私も時々熱が出て二十日ばかりも寝た。あの火傷の痕は山本君にも私にも残らないほど癒つたが、あんな出来事があつてから私達は一層親しみを覺えるやうにも成つた。

「こなひだ僕のお母さんのところから手紙が来ましたよ。お父さんも大分年を取つたし、お前一人を力にして居るんだから、お前もそのつもりで成るべく早く歸つて来るやうに心掛けてお呉れ」ツてお母さんが書いてよこしましたよ。」

斯う山本君は言つて、何か思ひ出したやうに、私のところにある寫真を出して見せて呉れなどと言出した。私が旅の鞆に入れて國から持つて來た寫真の中には、私の友達も居たし、親戚も居た。私はそれを取出して山本君と一緒に見た。國から來た女の葉繪書一枚にも大騒ぎするのは旅行者の情だ。山

本君は私が取出した寫真の中の日本風な髪のかたちなどに見入つた。

私の机の上には最近に國から着いた新聞や雑誌も置いてあつた。山本君はその雑誌などを暖爐の前へ持つて行つて饑ゑたやうに讀み耽つたり、同じ旅にある澤木君や郡君の噂をしたりした。私達はあの南獨逸の客舎の方でそろ／＼伊太利旅行の心支度を始めて居るといふ澤木君のことを話し合つた。私は瑞西の旅から貰つた郡君の繪葉書をも取出して見た。あの白い雪のつもつたアルプスの連峰を望んで見ると獨りで叫びたいやうな氣がすると言つてよこした其繪葉書も懐しかった。その日の山本君は同じ旅にある人達ばかりでなく、以前巴里に在留した人達の噂をもして、いろ／＼な旅らしい話を私のところへ置いて行つた。その中には、ある佛蘭西の女の話も出た。その女は三年も靡くといふことをしなかつた同胞の一人に終に熱い情を許して、別れ際には男の腕の血を啜らせて呉れとまで言出したとか。こつちの女はそこまで行くなど、いふ話をも置いて行つた。あか／＼とおこつた龜の子形の炭團の積重ねたのが山本君の歸つて行つた後まで、部屋の暖爐に残つて居た。暖爐のほつりといふものも旅では兎角落ちつかなかつた。

四十八

何時でも郵便の来る時には、それが普通の郵便物である限りは、配達夫が家番の許へ置いて行つた。それを家番のおかみさんが配りに来た。西伯利經由とした手紙が来るのは大抵朝の八時半か六時頃と定つて居て、例の珈琲と小さな振麵麩とで佛蘭西風の簡単な朝飯を部屋で済ました時分に下女が来てこんくと扉を軽く叩く音をさしたかと思ふと、極りで私は國の方からの便りを受取つた。来るか来るかと思つて待て居る頃に久しく消息を聞かない知人からの音信に接するのは嬉しかった。何本も手紙が集まつて来たのを新聞や雑誌と一緒にドカリと受取るのも嬉しかった。旅に来てからは、毎日のやうに國の方の便りが待たれた。舊い友人から送つてよこして呉れた手紙などは何度同じものを取り出して見るか知れなかつた。

私も随分簡素に日を送つた。年が若くて歐羅巴に来る人達とも違ひ、なまじい私には世帯持の長い経験があつた。それが私に酷く不自由な思ひをさせたが、旅行者の生活に慣れるに随つて萬事人手も借りずに、着物も自分で疊めば、買物にも自分で出掛けた。斯うした下宿に使はれる下女は朝の中に顔を洗ふ水を運んで来るとか、客の寢臺を疊みに来るとか、石炭の入つたバケツを提げて暖爐の火を焚付けに来るとか大凡受持の定つて居るようなもので、頼めば何でもして呉れないことは無いが、成るべく人は使はないことにした。月に二三度の按摩は缺かされなかつたものが、そんなものゝ無い土地へ来ては、それも御慶しだ。

この私がまるで一書生の昔に返つたやうに、その時になつて自分の周圍を眺め廻すと、私の爲ること言ふこと考へることは全く周圍とは關係の無いものであつた。何でも私は自分の爲たいことが出来た。それを好いと言ふものも無ければ、悪いと言ふものも無かつた。やゝもすれば荒癩れて了ひさうな恐ろしい心持は、その生活の無刺激から起つて来た。最早私は自分の皮膚の色も、自分の髪の毛の色も、そんなことは多く忘れて暮すやうに成つた。私が町へ買物にでも出ると、北の歐羅巴の方からでも来た

やうな旅の外國人がいそぐと街路を急ぐのに行き逢つた。その人は不斷の被觀察者の位置に立たせられたやうに、人からじろじろ顔を見られることを厭ひ避けるやうにして足早に並木の下あたりを歩いて行つた身に覚えのある私はその知らない人の表情を看て取ることも出来れば、又、憐む氣にもなつて、こんな骨折が一體何の役に立つだらうと思ふことさへあつた。

『あそこにも、エトランゼエが通る。』

と私はよくそれを自分に言つて見た。

三月に入つてカトリックの宗教季節が続いて居る頃に、私はこの下宿で思ひがけない珍客を迎へた。京都大學の河上君と竹田君とは白耳義のブラッセルから、東北大學の石原君は倫敦から着いた。

四十九

私の下宿では、一頃女の辯護士の試験を受けたといつて居た露西亞の女學生とその従兄弟に當るといふ年若な波蘭人とが他から食事だけに通つて居たが、それらの戀仲らしい人達も何處かの旅に出掛けて行つてしまつて、河上君等が巴里に着いた頃には佛蘭西人と獨逸人との二青年の客を泊めて居た。佛蘭西人の方はソルボンヌ大學の哲學科に通ふ青年で以前の澤木君の部屋に寢泊りして居たし、年若な獨逸人の方は以前の郡君の部屋を占領して居た。この下宿にあるだけの部屋は塞がつて居た。シモネエのお世話で、河上君等は近所の旅館に部屋だけ借りて、食事の度にこの下宿へ通ふことになつた。河上君と竹田君とは法科の教室を受け持つ人達で、その中でも河上君の専攻は經濟、竹田君は商法であつたし、石原君の學問は理論物理の方面であつた。斯ういふ人達が同じ旅館に落合つて、晝に晩にシモネエの食堂へ見えた。三君とも初めて逢つて見る人達ばかりであつたが、黙つて暮す旅の私に取つては食事毎に三君の顔を見、國の言葉をかはずだけでも嬉しかつた。私達は随分違つた立場から各自の旅の話を持ち寄つた。

『ブラッセルあたりから巴里へ來て見ますと、まるで田舎から出て來たやうなものです。』

食堂の奥にある暖爐の立に立つて斯う言ひ出すのは竹田君であつた。その竹田君が手を揉みく話したり笑つたりする側には、河上君が暖爐の火の燃える方へ肘掛け椅子を寄せて、

『私もこれで旅に来てから大分ハイカラに成りましたよ。髪に油をつけるやうに成りましたよ。あんまりその頭はひどいなんて、ブラッセルの方に居た友人が言ふものですからね。』

と私に言つて見せて笑つた。私達は自分等の背のことを言出すほど書生の昔に歸つたやうな氣で話し合ふやうに成つた。私も國を出る時に、『もう少しお前に背を呉れない、知らない土地へ行つて恥をかいて来て呉れるな、』と人に言はれて来たほど背が低い。その私に比べたら、河上君は歐羅巴人の中に混つても敗けをとらないほど高く見えた。

『斯うして集つて見ると、私が一番高いやうですナ。』

と河上君が戯れるので、竹田君は笑つて、

『背のことでは、何時でも彼様言つて河上君に自慢をされる。』

この竹田君と河上君とは國を出る時から道連れで、二人ともまだ歐羅巴へ来たばかりの旅慣れない様

子に見えた。何かにつけて二君は互に頼り合つて居るといふ風であつた。竹田君は河上君の方を見て、

二人で巴里を見物して歩いたその旅の心を比べ合ふやうに、

『何といつても、優秀な民族といふことは争はれませんナ。』

この竹田君の前置なしに言つた言葉は、河上君にはもとより、私にもその言はうとする意味がよく解つた。私はそうした場合に河上君の口から出て来る旅の感想を聞いて、君がなか／＼の論客であることを知るやうに成つた。

『打開けた話をすれば、』と河上君は竹田君をも私をも見て言つた。

『現代の日本が結局歐羅巴の文明に達しやうとするだけでは、私共は満足しません。それでは到底歐羅巴人には叶はないと思ひます。日本には日本固有のですね、全く歐羅巴と異つた、優秀な文明があると考へなければ、私共の立場はなくなります。』

竹田君は言葉を少く聞いて居て、

『同感です。』

と教授らしい調子の言葉でそれを受けた。こんな話の後で、私達は年若な佛蘭西人と獨逸人との二人の客と一緒に食卓に就いた。食卓で見る石原君は河上君や竹田君よりずっと旅慣れて居る様子でそれに旅で私が遭遇した同胞の中でも稀に見るほどの靜かな學者らしい心の人であつた。三君とも食卓に就いてからは、あまり國の言葉も出さなかつた。

食後に私が自分の部屋の窓へ行くと、電車道を渡つて旅館の方へ歸つて行く河上君や竹田君の後姿が眼についた。君等の泊つて居る部屋々と私の部屋とはボオル・ロワイアルの通りを隔て、斜に向ひ合つたやうな位置にある。丁度産科病院の門前と相對した珈琲店の階上あたりに君等の部屋々々がある。夕方にもなると、私は自分の下宿から旅館の窓々を望んで、

『向ふでも燈火が點いたナ。』
と思ふやうに成つた。

五十

『あなたの部屋は日當りが好くて羨ましい。』と河上君は又竹田君と一緒に食堂の方で、私を相手に話し込んだ。『向ふのホテルの方から見て見ますと、あなたの部屋には一日日が映つて居る。私の部屋なんか、朝の内にはほんの少し日が射すばかりです。』

他の食事仲間は既に食堂を出て行つた時で、巴里にある大學の理科室を訪ねたいといつて居た石原君もその日の夕飯後には早く旅館の方へ戻つた。シモネエは私達三人のために食卓の上を片付けて、日本の陶器まがひの灰皿などを出して呉れた。私達はその獨逸出來の皿の上に煙草の灰を落し、食卓を圍んで話した。

『私が歐羅巴へ行つたら必と懷郷病に罹るツて、京都を出る時に皆から言はれて來ました。』と河上君は私に言つた。

『これでは懷郷病にも罹りますよ。』と言つて軽く笑つたのは竹田君だ。

「ですから、」と河上君も笑つて、やゝ皮肉な語氣で、「歐羅巴へ行つたら人の買ふものは買つて被入つしやいつて、私はもう細君からちやんと許しが出て居ます。」

河上君は諸國の旅行者のために繁昌する巴里が反つてその旅行者から都會生活の墮落を招いて居るといふ事實を指摘しやうとして、わざとそんな皮肉な調子に出たかのやうでもあつた。斯様なデリカな話を聞くにつけても、國の方に留守居するといふ河上夫人の賢さが思はれた。

河上君は笑ひごところではないと言ふ風で、

「私の文部省留學生無用論といふのは旅に來て見から生れた意見です。私はそれを國の方へ書いて送つてやりました。國家の寶とも言ふべき學者を旅に送つて苦しませる必用は何もありません。どうせ斯様な旅で、しかも切りつめた旅費で、得るところの少いのは知れ切つた話です。新しい智識を求めらるなら、私共は京都に居た方が餘程好い。旅で手に入れたくとも入れられないやうな新刊の書籍などは自分等の大學に居て優に讀めます。斯様な旅などをして居たら、時世に後れるばかりですよ、」竹田君は手を拱いたまゝ、黙つて耳を傾けて居た。

「しかし、そんな話はまあ置きませう、」と言つて、河上君は氣を變へて、「こつちへ來て見ると、鍵の種類の多いのには一寸驚かされましたね。歐羅巴の生活は鍵の生活だ、と私は思つて來ましたよ。」

「鍵の生活とは面白い。こつちにはまた鍵も發達して居るやうですね。」と竹田君も言つた。

「そりやもう、屋外に出るにも鍵、部屋へ入るにも鍵——何にでも鍵です。昨日は竹田君と二人でクルニイの博物館へ行つて來ました。『操の帯』といふものも見て來ました。あゝいふもので縛つて置いて、昔の人が戦争に出掛けて行つたなんて、随分婦人を侮辱したものですな。しかしあゝいふものを見ると、こつちの人の人情がよく解ると思ひますよ。ほんとに、こつちの人は女の操にまで鍵です。」話好きな河上君は私を前に置いて、暫らく旅の「無用」を忘れて居るかのやうであつた。私も又河上君等がそんなに長く巴里に滞在しない人達だといふことを思つて、つい君等を食堂なり自分の部屋なりに引留め勝ちであつた。

「折角巴里にお出に成つたものですから、好いものを見たり聞いたりして被入しつて下さい。現代の歐羅巴で最も進歩したと言はれる藝術の一つに觸れて見て下さい。」

斯う私は言つて、佛蘭西に現存するあらゆる藝術を通じて最も私の心を引かれるもの一つ——ドビュッシーの音楽——を聞きに、河上、竹田の二君を誘はうとした。

シモネエの食堂で以前によく顔を見合せて露西亞の女學生が私に言つたことがある。「ベテルスブルグは私共の國にある歐羅巴風の都です。純粹な露西亞風の都が御覽に成りたくばモスコオへお出下さい」と。言ひ方は其とは違ふが、「東京は純粹な日本ぢや有りませんよ」と言ふほど國民性といふものに特に重きを置いて、左様いふ方面から歐羅巴を見やうとして居るのが旅の河上君であつた。この河上君に、竹田君の二人を誘つて、ガボオの音楽堂へと出掛けたのは三月下旬の土曜の晩であつた。私は石原君をも誘ひたかつた。ドビュッシー自身が演奏臺に立つて自分の作曲を自分で弾いて聞かせるやうなこ

とは巴里でもめつたに得られない機會で、實は暮のクリスマスの前あたりから私の心掛けて置いたことだ。石原君は都合があつて出掛けなかつたし、河上君は從來西洋音楽にあまり親まれないとかで、

「今夜もまた眠くなりはないか。」

と言つて笑ひながら、私と一緒に音楽堂の方へ向つた。

私達はその音楽堂へ行つて第一階のバルコニーの後部に陣取つた。私はそこに音楽好きな人達の集まる内論な席を見つけて置いた。

「斯う髪の毛の黒い連中が三人も並んだら、一寸目立ちますね。」

と私は竹田君や河上君に言つて見た。やがて人々の視線は一齊に薄青い色の服を着けて演奏臺の上に立つた一人の婦人に集つた。マラルメの詩（ドビュッシー作曲）を獨唱する爲にバルドオ夫人といふ人が大きな洋琴を背にして立つた。その後方に深思するかの如く洋琴の前に腰掛け、特色のある廣い額の横顔を見せ、北部の佛蘭西人の中によく見るやうな素朴な風采の音楽者がバルドオ夫人の伴奏として、丁度三味せんで上方唄の合の手でも弾くやうに靜かに、濛い暗示的な調子の音を出し始めた。

その人がドビュッシーであつた。バルドオ夫人が一曲を歌ひ終ると盛んな拍手が聴衆の間に起つた。其時ドビュッシーは夫人の背後から簡単な會釋をしたが、自分の音楽が聴衆の喝采の渦の中へ巻き込まれるのを迷惑がるかのやうに見えた。

『いかにもあの音楽者は素朴な感じのする人ですね。西洋人のやうな気がしませんね。此分なら今夜は眠くならず済みさうです。それにこゝへ集つて居る人が好う御座んす。すべて氣に入りました。』斯う河上君は私に言ふやうに成つた。その晩ドビュッシー自身はかすかすの自作の曲を心ゆくばかり弾いて聞かせたが、中でも六つばかりの小曲を集めた『ル、コアン、デ、ザンファン』は深く私の心を惹いた。

私達がガボオの音楽堂を出た頃は最早大抵の店が戸を閉めて、珈琲店などから射す強い灯の色だけが夜の街路に流れて居た。蒸熱いほどの音楽堂から屋外へ出て見ると頬に觸れる空氣は冷たいとは言つても最早どこもなく春らしかつた。私達はマロニエの芽の出る頃の夜の息を吸ひながら、乗合自動車のある廣小路まで話し／＼歩いた。巴里へ來ては國の方の空の様に星を見つけることも稀だ。でもそ

の空を眺め／＼歩いて行くと、『小さな羊飼ひ』とか、『雪は踊りつゝある』とか、『人形の窓の下の歌』とか、お伽話の清い深い情調を思はせるやうな小曲が私の耳について居た。私はあの大人の心をも小供の心をも誘ふやうに夕方の方の林に小鳥の群が集つて互に鳴騒いで居る様な樂音があり／＼と耳の底に聞くことも出來た。あの音楽者の指が洋琴の鍵盤の極高い音の出る部分に集つて居るのをあり／＼と眼に見ることも出來た。ドビュッシーの音楽が後期印象派の音楽と言はれるのも意味が深い。私はあの音楽をルノアールやセザンヌの繪畫に結びつけて見たり、佛蘭西の老大家なるサン・サンに見るやうなワグネルの影響が最早ドビュッシーには跡を絶つて居ることなどを想像したりして、乗合自動車の車窓から明るい町や暗い町を眺めて乗つて行く間も、私の心はそんなことで満たされて居た。天文臺前まで戻つて來た頃は大分遅かつた。でも私達はそのまま、各自の部屋に別れて眠て了ふのを惜しく思つた。さふいう時に都合の好いのは遅くまで店を開けて居る『リラ』で、まだあの珈琲店の窓からは灯がかんかん泄れて居た。私達は『リラ』の一隅に陣取つて、音樂會から歸つて來た互の心話をし合つた。河上君は眠くなるどころか、巴里へ來て送つた中で今迄にない晩であつたと言ひ、旅の土

産話しが一つ増えたと言ふので、私も折角誘つた甲斐があつたと悦んだ。

『今夜集つた聴衆などは、是方でも知識階級の人達と見ていゝんでせうね。』

『でも、私共の前に腰掛けて居眠りして居た女もありましたぜ。』

こんな話をして笑つた後で、河上君はその夜聞いたやうな音楽、さういふ趣味、又それを聞きに集まる一部の階級があることは認めるけれども、それが民衆の性質を表すものではないとの説が出た。それに就いて、私は一部の少数な最も進んだ人達があつてやがて時代と言ふものを導いて行くのではなからうか、そう云ふ人達が代表しないで誰が民衆の精粹を代表するだらう、その立場から大分君に反対した。尤も、その夜の話は兎角言葉の上の争ひに落ちて、眞に思ふことを盡せなかつた。

『小さい反抗心は捨てやうじや有りませんか。もつと歐羅巴をよく知らうぢや有りませんか。』と私が言ふと、河上君は社會研究者であり科學者である君の立場から、

『愛國心といふものを忘れないで居て下さい。』

斯う私は直ぐに君から叱られてしまつた。

五十二

東北大學の石原君はこれから伯林を経て歸朝の途に就かうとして居る人であつた。君が巴里滞在の豫定は僅かの日數で、三月の末には早君を送らねば成らなかつた。短い御馴染を思へば名残惜しくて、よく河上君や竹田君とも一緒に集まつて話した。

ある晩も、私は産科病院の前の電車路を越して向ふの旅館に河上君の部屋を叩いて見た。『ボオル・ロワイアル旅館』とは名ばかり、御世話をした甲斐もないやうな古いホテルであつたが、竹田君や石原君がそこへ一緒に成つて、四人で暖爐の前に集つた時は、私達は一切の怗しさも忘れて話した。さまざま旅らしい話の末に、何故舊い日本には科學といふものが産れなかつたらうといふことが私達の話頭に上つた。

河上君の呼んだ旅館の給仕は紅茶などを運んで来た。給仕は暖爐に石炭をも加へて火氣をさかんにして行つた。河上君はその火の燃えるのを眺めて、

『東洋に科學の起らなかつたことは、自分等にとつて一つの宿題です。』
と言ひ出した。

その時、石原君は斯ういふ説明をした。科學的精神とは單に物を究めやうとするばかりでは無い、同時にそれを自分等の實生活に當嵌めやうとする心である。自分等の先祖にも物を究めやうとする心はあつた。例へばニュウトンと同時代に、吾國にも和算の大家があつておなじやうな數理を明かにしたと言はれてやる。けれども自分等の先祖の爲たことは、多くは單にそれ丈に止まり奥儀とか秘傳とかに深く藏められ、自分等の實生活に當嵌めやうとする心に缺けて居た。だから種々の發明が生れて來なかつた。石原君は又、自分等日本人があまりに他の摸倣を急ぐことを言つて、支那の文明が輸入され、ば忽ち支那人と同程度に進み、歐羅巴の文明が輸入され、ば忽ち歐羅巴人と同程度に進み得る。そこに自分等の特質がある。しかしそれ以上に出やうとはしない。例へば自分等日本人はあまり他の

摸倣に急であつた爲、全く國語と性質を異にした漢字などを輸入し、今日までその不便から脱することが出来ないで居る。何故彼様他の摸倣を急いだらうか、何故もつと固有の國語に適した文字を發明しなかつたらうか、斯う話した。

斯の石原君の靜かな言葉が全く氣質を異にして居るやうな河上君をいら／＼させずには置かなかつた。熱心な河上君は戦ひを挑まれたかのごとき面持で、奈何なる國の文明といへども他の摸倣から始まらないものは無いことを言つて、歐羅巴人が希臘羅馬の文物を受繼いだのは自分等の先祖が支那印度を受繼いだのと異なるところが無い。のみならず、自分等日本人は必ずしも他の摸倣を事とする民族では無い。見給へ、支那の文明が輸入された當時にあつて、自分等の先祖が奈何に多くの犠牲を拂つたかを。何時の間にか自分等は外來の文明を自分等の物として、更により好き物を産出した。吾國に於ける佛教の發達などは其一例である。支那印度の振はざるに引換へ、佛教そのものは今も猶吾國に活きつゝあるではないか。西洋の文明が輸入されてからまだ日が淺い。更に四十年の後、五十年の後を待て。自分等は西洋へ出掛けて來てから、一層日本を愛するやうに成つた。自分は今、眞面目だ。

それが河上君の話であつた。

「しかし、今日の日本のやうな状態では心細いと思ひますね——もつとしつかり違らなくては。」

「なあに六十人や七十人ぐらゐるのハイカラ者が居たつて、日本の國民がビクともするものですか。」

「何も私の意見は摸倣を全く不可とするんぢやない。唯、あんまり早く受納れ過ぎると言ふんです。

是が獨逸人とか英吉利人とか是方の人とかであつて御覽なさい。他から奈様な好物が來ても容易にはそれを受納れないやうなところが有ります。」

「まあ、五十年の後を見て下さい——なか／＼日本も違りますぜ——」

河上君と石原君の間へ穩かに兩方の説を聞いて居るやうな竹田君が入る。終には話がこんがらがつて、枝に枝がさして、何時の間にか夜も更けてしまつた。私達は互に寢ようと言つて別れた。

五十三

復活祭の季節が近づいて來る頃には私はもうシモネエの食堂に石原君を見なかつた。この土地で耶穌の受難を記念するといふバツションの日の前に、伯林よりとした石原君の葉書が私のところへ届いた。「汽車で短い夜を明かして獨逸の國境の税關地で起きた時は、うす／＼と空の白んだ時でした。汽車の中の一日は北獨逸の平な農地や、ライン地方の工業の中心點などを眺めながら、それでも大分退屈しました。鼻眼鏡かけた宗教傳道でもやるやうな女が乗合して居ました、私はさういふ女は嫌ひです。外に客も少う御座いました。夕方に一年振で伯林の地を踏みました……」と石原君は書いてよこした。

四月上旬の終に近いバツションの日から下旬の復活祭の日までおよそ二週の間は、あの「肉食の火曜」からミ・カレエムまで續いた物齋精進の日に比べると、一層宗教季節の感じが深い。私は佛蘭西風な茶の會といふものへ河上君等を案内したいと思つて彫刻家のジュバン女史の家庭へ二君を同伴したり時には旅の憂さ晴しにビリエールの舞踏場へと二君を誘つたりしたのは、羅馬舊教でいふ枝の日（ラ

ムウ)の前後であつた。復活祭が来て見ると、河上君や竹田君も早獨逸へ向けて發つて行つてしまつた後であつた。

人を送る度に旅はさびしかつた。シモネエの下宿で食卓を共にした人達だけを數へて見ても、私は既に大寺君を送り、小山内君を送り、澤木君を送り、郡君を送り、石原君を送り、河上君を送り、竹田君を送つた。あの人達は互に年齢の相違こそあれ、發つて行つた後まで眼に見えない種々なものを私のところへ残して置いて呉れた。各自に氣質を異にして居るやうなのがあの人達だ。しかし、「自分等の國は駄目だ。」と言つた大寺君でも、「六十人や七十人のハイカラ者流が居たつて、日本の國民がビクともするものか。」と言つた河上君でも、國の方から來た旅行者の一人だに今の私達の時代に象徴的な位置に立つて居ないものは無いと思つた。

私は自分の部屋の窓へ行つて見た。もし互の事情が許すなら、もう一度白耳義のブラッセルか倫敦あたりで落ちたいものだと思つて行つた河上君等の言葉を思出して、あの好ましい人達が去つた後の旅館の窓の方を望んだ。復活祭の前あたりからほつ／＼燃え出したやうなブラタヌが窓の外に芽

出を急いで居た。一日は一日より形も大きく色も濃くなつて行くやうなその並木の新芽は、河上君等が居た頃のボオル・ロワイアルの町をやがて若葉の世界へ變へやうとして居た。一切のものを忘れやうとして遠い旅に來た私のところへもやがて一年近い月日がめぐつて來るやうに成つた。私は自分の國から離れるために斯の知らない土地へ來たのか、自分の國を見つげるために來たのか、その差別もつけかねるやうに思つて來た。日本なしには一日も私は生きられなかつた。

五十四

不思議な婦人が町をうろ／＼して居た。昨日も、一昨日もその婦人の姿を見かけたものが有つて、誰言ふとなく白痴だらうといふ噂が傳はつた。私の下宿の人達は戯れに「カロリン夫人」の名をつけた。「カロリン夫人」は大きな紅い薔薇の花のついた帽子を冠り、白い手袋をはめ、何を待つともな

く斯の界限を往つたり來たりして居た。そんな白痴の婦人を見かける丈でも私は旅らしい氣がして、窓から眺めて居ると、山本君が來て部屋の扉を叩いた。

「好い陽氣に成りましたね。僕の來る途中にはもうマロニエがほつ／＼咲いて居ましたよ。」

斯ういふ山本君を迎へて、國から到來した茶でも煮るのは私の樂みであつた。私は洗面臺の横手に置いた古い湯沸やアルコール・ランプを取りに行つて、

「國の方で炬燵にでもあたつて居る人は羨ましいなんて、よくそんな話が出ましたつけが、漸くそれでもバアク（復活祭）が來るやうに成りましたね。僕などは君、極樂へ島流しに成つたやうなものですよ。」

「極樂へ島流しですか。」と山本君も笑つた。

「こつちへ勉強に來た連中は、みんな斯様な風だつたんでせうか。」

「どうして今の美術家仲間なんか、みんな贅澤に成つた方だと言ひますよ。前に來た連中の時代などは今よりもつとひどかつたと言ひますよ。」

「思ひやられるね。あの辛抱強い中村不折君などは奈何な苦しみをして行つたらうと思ふね。」

圓い花の輪のやうに燃えるアルコール・ランプの火は部屋を楽しくした。山本君はそれを眺めながら、
「僕もこの節、お念佛を唱へて居ます。さういふ心持に成つて來て居ます。僕の持つてる舊いものはすつかり壊れてしまひました。それは美事に壊れてしまひました。そんなら奈何いふ新しい道を取つて進んだら好いかといふに、それがまだ僕には見つかりません。僕はそれを待つより外に仕方はありません。それが僕の心に象を取るまで、あせらずに待つより外に仕方がないと思ひます。旅は私を他力宗の信者にしましたよ。僕はお念佛を唱へて、日々進んで行つて見ようと思ひますよ。」

「さぞお父さんも君を待つて居ませう。」
「え、僕はお父さんのところへも手紙を書きましたよ。僕のお父さんといふのは、それは僕のことを心配して居て呉れますからね。お父さん、この節はお念佛を唱へるやうな心になりましたから、そんなに心配しないで待つて居て下さい」ツて、ね。」

斯の山本君の顔を見て居ると、相變らず思はしい製作も出來ずに心の戦ひのみを續けて居るのは他日

にも苦しげであつたが、しかし私が山本君に期待するもその樂な道を通らないところにあつた。その年のカーナバルには山本君は假面を冠つた男の圖を描いてめづらしいユウモアを見せた。それも君の意に満ちた製作でなかつたことを私は覚えて居る。

「これからは、山本君の畫室を「念佛庵」とでも呼ぶことにしますかナ。」

と私は言つて見た。そのうちに湯沸の湯が煮立つた。國から持つて來た薄手の煎茶茶碗も、一つ破れ、二つ破れして、白地に藍色の蘭の模様をついたのが唯一つだけ残つて居た。私はそれを盆の上に載せ、香ばしいにほひのする國の方の綠茶を注いで山本君に勧めた。一年近く旅するうちに、國から饒別に貰つて來た盆の漆も巴里の空氣に乾いて、ところ／＼剝て取れて來た。風土の相違はこんな茶道具一つの上にもあらはれて居た。その時、私は山本君と一緒に熱い茶を啜りながら話した。私は毎日食卓を共にする二青年の客のことをそこへ持出した。隣室に寢泊りする若い佛蘭西人の方はエルサイユ生れの軍人の子息で、ソルボンヌに哲學を修めて居る至極人柄な佛蘭西氣質の青年だ。あの名高い佛蘭西の小説家の子で今は「ラクシヨン・フランセズ」一派の鼓吹者なるレオン・ドオデエの新著述な

ぞを私に見せて呉れたりするものも、その隣室の青年だ。若い獨逸人の方は北獨逸の生れで、父は可成な商人ださうであるが、見學のため倫敦から巴里へかけて出掛けて來て居るといふ。二人とも、どうかすると莫迦に騒ぐことの好きな、氣の置けない人達だ。まだ河上、竹田の二君が旅館の方から食事に通ふ頃のことであつたが、ある日私は獨逸人の方と「オペラ」の噂をして、自分などは左様度々見に行かうとも思はないと言つたら、先方は眼を圓くして、巴里の「オペラ」は歐州第一と言はれて居る名物であるのに、夫を私がケナしたと言つて食卓の上で皆に其話を吹聴した。日頃國自慢にかけては犬と猿のやうな佛蘭西人までが其時ばかりは獨逸人と共に私の方へ鋒先を向けて來た。私は二人の話を遮つて斯う言つた。成程「オペラ」は立派なものだ、けれども其演技なり音樂なりは今餘りに圓熟し過ぎた藝術の感がある、もつと生氣あるものを自分などは見たり聞いたりしたいと思ふと。そこで私は一例としてドビュツシイの音樂を引いた。すると若い佛蘭西人が、ドビュツシイには時々好きなものがある、それは自分も認める、しかし偉大な古典的なものに比べて彼様な新しい音樂が何だと言つて、酷く激した調子に成つた。斯ういふ議論が食卓で始まる度に、何時でも仲裁役はシモネエであ

つた。人各自趣味があるといふやうなことを持出すのがこの下宿の主婦の癖だ。若い佛蘭西人は聞
入れないで趣味は趣味でも好い趣味もあれば悪い趣味もあると言つて、所謂新しいとせられて居る多
くの藝術家の群を嘲つた。私が山本君を見て言はうとしたのは其話であつた。

五十五

『その哲學科の大學生はアリエスといふ名の佛蘭西人です。』と私は山本君に話した。『若い獨逸人の容
の方はセデエルといふ名です。あの時、僕も左様思ひましたね。つぐ／＼自分も日本から来た人間だと
思ひましたね。僕のやうな年齢をした男が新しいものを探して居て、若い佛蘭西の大學生が古典に驚
いて居るなんて、面白い對照だと思ひましたよ。』

この私の話は山本君をほゝゑました。私は言葉を繼いで、

『そのアリエス君はニイチエの哲學書でも讀まうといふ人ですぜ。その人が君、巴里のシャンセリゼ
エの新しい劇場などは建築として悪趣味だと言つて居るんだからねえ。しかしあの佛蘭西人は面白い
青年ですよ。僕の部屋へも遊びに来ますし、よく種々な土地の事情を話して聞かせて呉れますよ。』
しばらく私は山本君と二人で斯様な話に時を送つた。

『さう言へば山本君妙な女が此節町をうろ／＼して居ますよ僕の下宿などでは皆大騒ぎして居ます。』
と話し聞せて、やがて山本君と連れ立つて下宿を出た。天文臺前の廣場に近い町の角あたりまで二人
で話し／＼歩いて行くと、並木はそこで變つて、黄緑な新牙の萌え出したプラタマの代りに、早青
青とした若葉を着けたマロニエが見られた。

『マロニエの花が咲いて居ますよ。』

と山本君は七葉の若葉の生茂つた枝の上の方を私に指して見せた。白い蠟燭を挿したやうな花がその
若葉の間から顔を出して居た。『これがマロニエの花ですか。』と私が言つて見た。

『どうです、好い花でせう。』

「京都大學の河上君がストラスブルグから葉書を呉れましてね、「マロニエが咲いたらなんて、よく話が出たから、奈様な花かと思つたらつまらない花ですわねえ、」なんて書いてよこしましたつけ。これをつまらないと言ふのは少し酷い。」

一つ／＼取出して言ふ程の風情があるではないが、旅人としての身にはどこか寂しいその花の姿に心を引かれた。

「去年の今頃は丁度僕は船でしたつけ。」

と私は山本君に言つて見せた。最早季節は黄色い金雀花たしげに遅く、李に遅く、香の高い丁香花の頃と成つて来て居た。アンリイ・ド・レニエーの譯詩の一節「きのふゆへに夕暮重し、」とよく口吟んで居たやうな山本君の眉も何となくのびのびと見えた。私達の足が向いて行くところは、何と言つても氣の置けない「シモンヌの家」の方であつた。

發つ發つといふ噂があつて發たなかつた小林君がいよく北の停車場から歸國の途に上るといふ日は私は山本君等と共に停車場まで見送りに出掛けて行つた。北の停車場は獨逸から露西亞の方面へ向ふ

旅客の集まるところで、そこへは私も既にいろいろな人を送りに行つたこともある。でも、その日ほど送りに行くといふ氣のした事も少かつた。天文臺前から電車で停車場の近所まで乗つて、込入つた構造の建築物の内部へ入つて見ると、美術家仲間の會合でもある毎によく集まつた羅旬區方面の連中が、いづれも別離を惜みに來て居た。長谷川、安井、金山、柚木、藤田、藤川の諸君から、佛蘭西の婦人と結婚した稻垣君までが構内の歩廊に集まつた。その日は巴里に長く留學する理學士の福見君も見えた。山本君はじめ、そこに集まつた連中で、一人として旅に揉まれて見えない人はなかつたが、その中でも土地の事情に精通した福見君の元氣な様子が際立つて私の眼についた。小林君は旅の中の旅らしい姿で、皆の中を歩き廻つて、無量の思ひを堅い握手に籠めて居た。丁度遠い島にでも集まつて居るものゝところへ迎への船が來たやうに歩廊に横付けになつた北の國境行の汽車が小林君の乗組むのを待つて居た。私達が小林君を見送るのは、ある一人だけが許されて迎への船に乗るのを見送るに似て居た。私はその歩廊へ別離を惜みに來た山口おつがさんと日本飯屋のおかみさんの二人の婦人も送つた。

小林君を送つて置いて、やがて私は地下電車でワグンの停車場へ出た。羅馬舊教の「コムミュオン」の儀式のある頃で、ノートル・ダム分院の前あたりまで歸つて行くと、丁度寺参りの戻りらしい幾人かの娘に逢つた。清楚な白衣を着けて改まつた顔付をした處女等は母親達に連れられて幾組となく若葉の町を歩いて居た。

五十六

ルユキサンブル公園内の薔薇の花園もさかりの頃となつた。日に日に茂つて行く町の並木の若葉も少し萎れる頃には五月らしい夜の雨が来て、柔かな新緑が一層勢ひよく活きかへつた。周囲は最早一年前に私が初て巴里に着いた頃と同じ青葉の世界に成つて行つた。あのリオン線の終點にあたる停車場の方から辻馬車に旅の荷物を積んで、朝の響もまだ喧しくない街路を乗つて來た時の記憶がもう一度

私の眼前に歸つて來た

高村、森田、正宗の三君が新たにシテエ・ファルギエールの方に着いたといふ頃に、私は山本君を訪ねながら例の別荘跡へ出掛けた。

『正宗達も着きましたよ。』

と言つて元氣づいた山本君は自分の畫室の方でなしに、母屋の二階へ私を案内して呉れた。高村君は西伯利經由で北歐の方面から、森田君と正宗君はスエス經由で倫敦から、三君は殆ど同時と言つても可いくらゐるにファルギエールへ落合つたと聞いた。二階の角のところは差當り正宗君の部屋に宛てゝあつた。その部屋で、山本君は三君に私を引合はせて呉れた。いづれも國の方で名前を聞いたり製作を見たりして居る美術家ばかりで、初對面の人達のやうな氣はしなかつた。

『正宗は矢張正宗だ。もつと弱つても來るかと思つたら、君の元氣なものには感心した。』と山本君が言つた。

『そりや山本なんかとは違ふよ。』